

# ゲルマン文化圏における『聖書』の成立

河崎 靖

## 序

今日のクリスマスの賑わいを見ていると、古くは復活祭（イースター）の方がクリスマスよりも、むしろ盛大に祝われていたというのは想像し難いくらいである<sup>1</sup>。ただ、イギリスの小説家ディケンズ（Charles Dickens）の『クリスマス・キャロル』が出版（1843年）されて後、クリスマスの祝い方が変わったと言われるのも事実である<sup>2</sup>。実際、この小説は出版された当初から人気を博し、高い評価を得た作品であった。

復活祭（主の復活の主日）とは「主の過越<sup>すぎこし</sup>」を記念する祝祭である。この「主の過越<sup>すぎこし</sup>」とは、神の国の訪れを、ことばと行動をもって現わされたイエス・キリストが受難と死を通して復活の栄光に移られたということである。したがって『新約聖書』の民、キリスト者にとって、「主の過越<sup>すぎこし</sup>」を祝う祭が年に一度、盛大に祝われるのは当然のことである。この祝祭は本来、受難・死・復活という主の過越のできごと全体を記念するものであるので、それゆえ、できるだけ、できごとの経過を忠実に祝おうとするようになった<sup>3</sup>。4世紀の後半からは主の過越の聖なる三日間（イースターの前後をも併せて祝う）が重要なものとなった<sup>4</sup>。こうした趣旨で言えば、復活祭にしてもクリスマスにしても、いずれにせよ、祝祭の主人公はイエス・キリストのはずである。

さて、次の絵は、画家のF・アイヘンバーグが、ニューヨークのスラム街の公園でのホームレスの人たちへの炊き出しの様子を描いた宗教画である。ここでは、教会のシスターやボランティアの人たちが炊き出しをして食事を配っている。



ホームレスの人たちは長い行列を作って自分の順番が来るのを待っている、そういう光景である。画家のアイヘンバーグはこの様子を見て、ところでイエスはどこにおられるのだろうかと考えた。すなわち、彼は、炊き出しをしているシスターや信徒たちの中なのか、あるいは、並んで食事を待っているホームレスの人たちの中なのか、どちらの側にイエスがいるのかという自問自答をしながらこの絵を描いたという。

この絵画の特徴は、イエス・キリストが、サービスをする側ではなく、食事を受け取るため長い列を作っているホームレスの人たちの中に並んでおられるという点である。ちょうど真ん中あたりに後光が差しているように見えるのがイエスである。アイヘンバーグは炊き出しの風景を眺めているうちに、サービスを受けなければならないほど弱い立場に立たされた人の側にイエスはおられるに違いないと確信したというのであった<sup>5</sup>。このように、ニューヨークでは、ホームレスの人たちのために活動するグループが、州政府などから補助金をもらい、大勢のボランティアに呼びかけて炊き出しをしており、こうしたボランティアの人たちの9割以上がカトリックやプロテスタントのクリスチャンである<sup>6</sup>。この文脈に絡んで思い出される言葉がある。かつてマザー・テレサが述

べた次の文言である。

「私は一日に二度、イエス様と出会います。一度はミサの中で、もう一度は街中の貧しい人々の中で<sup>7)</sup>」

ここで言われているような隣人愛というテーマは、実は、すでに古く『旧約聖書』の中で説かれている。例えば「レビ記」の19章18節に「自分自身を大切にするように、隣人を大切にしてください」と記されている。そして『新約聖書』では「ローマ書」の中に、次のような一節がある：「他人を大切にする者は律法を完全に守っているのです。姦淫するな・殺すな・盗むな・むさぼるなという戒め、また他にどんな戒めがあったとしても、それらは〈あなたの隣人をあなた自身のように大切にしてください〉という言葉の中に要約されています」と<sup>8)</sup>。ここで説かれているのは、いずれも愛というテーマであって、「(相手なり対象を)大切にする」という気持ちである。イエスが説くエッセンスは、この「大切にする」という気持ちなのである。

こうした『聖書』のエッセンスをゲルマン文化誌の立場から検討するのが以下の論考である。本来、異教徒であったゲルマン人の間にキリスト教の本質の部分があるように浸透していったのか、そのプロセスを解き明かしたい<sup>9)</sup>。

## 1. ゲルマン人とキリスト教

カエサルの昔から、アルプスの北側にゲルマン人らがいたことは知られていた。当時以来の、ゲルマン人とローマ帝国との関係はある程度、歴史的記述も残っている。西ローマ帝国の北方地域における諸民族に関し、クメール & デュメジル (2019:34) は、「蛮族の軍隊は、領域を征服しようとも帝国と戦争して勝とうともしていなかった」と指摘し、ゲルマン諸部族は侵入・襲撃を企てていたのではなく略奪目的であったと説明する<sup>10)</sup>。ゲルマン部族の諸国家が新しく立ち上がっていく経緯、国家としての性格、それぞれの内部組織の特徴など、

成長していく段階ごとに捉える必要がある。

蛮族の王にとって、ある程度、領土が大きくなってくると、いわばローマの統治の原則へとたち帰る必要があった。例えば、アングロ・サクソン王国についても、荒廃したローマ属州として混乱が頻発していたという報告がある。ブリタニアの領域国家への政治的再組織化は、6世紀中葉になってようやくフランク族（島の南東部に強い影響力を有した）のもと進んだと言える<sup>11</sup>。蛮族の宮廷は、ローマのモデルに倣って、重要な文化的中心であり続けた。ただし、文学作品は総じて、唯一の文化的言語と考えられていたラテン語で書かれていた<sup>12</sup>。言語について言えば、ある民族が一朝一夕にして自らの母語から他民族の言語に移るものではないということは十分に認識しておかなければならない。たとえ数世代のプロセスを経ての経緯だとしても、言語の交替という事態はある一定の条件が整っている場合のみである<sup>13</sup>。フランク人のガリア侵略を例にとってみれば、言語的影響は確かに大きいものではあったが（イル・ドゥ・フランスにまで影響が及んでいる）、その程度はガリア地域全般に一律に広がっているわけではない。影響の度合いが地域ごとに濃淡があるものである。そして最終的には、フランク人は自分たちが植民地化した国の言語を採用することになる<sup>14</sup>。

上のように4世紀末以降、ローマ帝国の領内に、いくつものゲルマン諸部族の国家が建設された背景には、もちろんローマ帝国の崩壊があったからではあるが、ローマという文明世界が瓦解し、これを言わば養分として新しい世界の芽が吹いたとも言えよう<sup>15</sup>。476年の西ローマ帝国滅亡後、蛮族たちは、ローマの伝統の多くを存続させる形で、ローマ帝国の元属州の地に自立的国家を形成していったのである<sup>16</sup>。彼らの社会は6世紀になるとまさに王国と呼べる政治社会にまで成長していた<sup>17</sup>。ただ、蛮族の王たちは、独立を獲得したにもかかわらず、自ら、ローマ帝国（ここではビザンツ帝国のこと）の下僕と称していた。例えば、フランク王国のクローヴィスは508年に皇帝アナスタシウス1世から、ビザンツ帝国への奉仕に対して、執政官という名誉ある勲章を受け

取っていたほどである<sup>18</sup>。

さて、ローマ帝国とゲルマン世界の間にあった、文明の十字路アルザスが、言語使用の面でフランス語・ドイツ語の間にあったという伝統は歴史的なものである。ただ、民族同士というレベルではないけれども、アレマン族のキリスト教化の際に、アルザスに布教に来た最初の伝道師の中に、ガリア出身の者がいたことが確実にわかっている。こうして、ガリアのキリスト教団とアルザスとの間には恒常的な関係が築かれ、10世紀にアルザスの修道院の再組織化が始まると、この仕事に着手したのがフランス語系の修道士であったのである。彼らはアルザスの民衆に語りかけるのに、自国のフランス語を話さねばならなかったが、この折、助けになったのが、フランス語を理解するアルザス人修道士であった<sup>19</sup>。ところで後代、フランスでは、プロテスタントであるがための迫害は凄惨なものであった。拷問・死が待ち受けていたのである。このため祖国を捨てた人も数多くいたという。こうした状況の中、フランスの各地方からアルザスへの流入は夥しい数であった。フランス語系のプロテスタント（ユグノー）移民が最大となった都市はストラスブールであった<sup>20</sup>。

## 1 - 1. アルザス

左耳はドイツ語しか聞こえず、右耳はフランス語しか理解しない。

『ル・モンド』（1993.11.6）

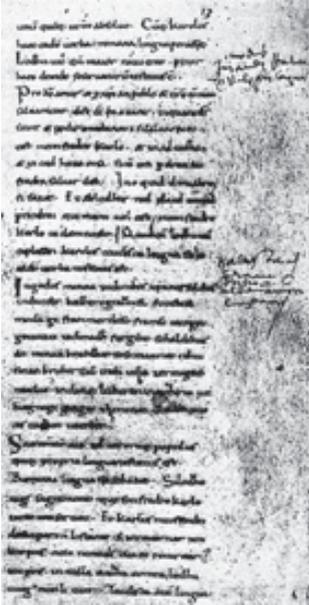
文明の十字路アルザスでは、生まれついた時のことばを話すようになるのだが、この母語（Muttersprache）とは常に、ドイツ語の方言形態であるアレマン語とフランク語である。これらの方言は、5世紀の「ゲルマン民族の大移動」以来、約1500年間、続いているわけであり、これこそがアルザスの言語文化の根幹をなすものである<sup>21</sup>。

さて、アルザスは、ヨーロッパ文明の十字路、有史以前からケルト・ゲルマ

ン・ラテンなどの諸民族が入り乱れ、闘争し、西欧世界の形成に深く関与してきた「兵士の通り道」であった。かつてゲルマンとラテンのヨーロッパの二大文明が衝突を繰り返してきた「文明の十字路」であったことを考えると<sup>22</sup>、今日、このアルザスの地、州都ストラスブールに、「欧州軍」（独仏合同軍+ベルギー軍）の司令部が設置されていることは感慨深い<sup>23</sup>。

そもそもアルザスは久しくケルト人のものであったが、紀元前1世紀に、まずゲルマン部族に、次いでローマの軍団に侵略された。後にゲルマン民族の大移動期にアルザスに侵入して来たのはアレマン族（ゲルマン民族の1部族）である。彼らは必然的に、アルザスの支配者ローマ人や、すでに北ガリアを占領した後も南進を続けていたフランク族と衝突した。その対立（特に、アレマン族 vs. フランク族）は熾烈で長らく決着がつかなかったが、結局496年、フランク族がトルビアック（アルザス地方のどこなのか不明）の決戦でアレマン族に勝利した<sup>24</sup>。

842年に「ストラスブールの誓い」（カール（シャルルマーニュ、742-814年9大帝<sup>25</sup>）の2人の孫、後のドイツを領有するルートウィヒ（ルイ）、および、後のフランスを支配していたシャルルの間に交わされた文書<sup>26</sup>。独：die Straßburger Eide, 仏：les serments de Strasbourg）が異なる2つの言語で取り交わされることになる<sup>27</sup>。このこと自体、言語の問題として記念碑的事項であり、その史的背景を辿っておかなければならない。すなわち、かつてローマ帝国は領土が広大で、ゆえに古典期のラテン語の求心力は絶対的であったが、それでも帝国末期以降、ラテン語の平準化が進み、ラテン語の話し言葉を元にするロマンス系諸言語（フランス語・イタリア語・スペイン語など）が生まれ始めてくるようになる。こうした経緯の中、「ストラスブールの誓い」が、ゲルマン系の部族の言語、および、ロマンス語系の言語（ガロ・ロマンス語）で公にされたのであった<sup>28</sup>。ルイ（ドイツ側）とシャルル（フランス側）の両陣営が軍事同盟・政治協定を平和的に実施するため相互に行った交渉（842年2月14日）が「ストラスブールの誓い」であり、2つの国家の創設であり、また同時に2

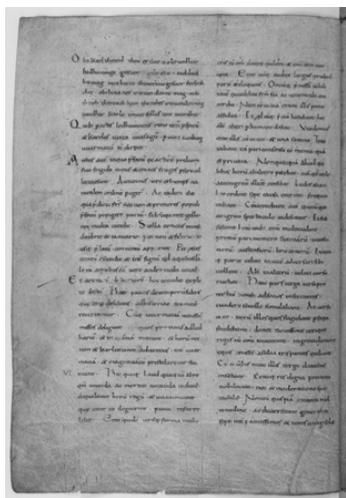


[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Sacramenta\\_Argentariae\\_\(pars\\_longa\).png](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Sacramenta_Argentariae_(pars_longa).png)

つの言語の確認でもあった<sup>29</sup>。

「ストラスプールの誓い」は羊皮紙の上にほんの数行ばかりが記されているにすぎないが<sup>30</sup>、ラテン語からフランス語への変化プロセスの1段階を示すものとして興味深いものである。いわば古フランス語 (ancien français) の萌芽が見てとれる<sup>31</sup>。この誓約文書は、843年の「ヴェルダン条約」に先駆けて、ヨーロッパの2大言語ひいては2大国家の誕生を宣言しているとも言える<sup>32</sup>。

さて、「ストラスプールの誓い」の言葉の実態であるが、まずルイ (ドイツ王) が相手方の言語であるガロ・ロマンス語 (俗ラテン語の1方言) で誓いをたて、一方、シャルル (フランス王) は、ルイの従者たちが理解できるように、ゲルマン系の古高ドイツ語 (正確には古ライン・フランク方言) で語る。その



Source: gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France, Département des Manuscrits, Latin 9790



ストラスブールの誓い

後、両陣営がそれぞれに誓いの言葉を自らの母語で宣誓する。「ストラスブールの誓い」のテキストそのものは以下の通りである<sup>33</sup>。

ルイが（最古とされる）フランス語で次のように語る。

Pro Deo amur et pro christian poblo et nostro commun salvament, d'ist di en avant, in quant Deus savir et podir me dunat, si salvarai eo cist meon fradre Kar-

lo, et in adiudha et in cadhuna cosa, si cum om per dreit son fradra salvar dift, in o quid il mi altresí fazet, et ab Ludher nul plaid numquam prindrai qui meon vol cist meon fradre Karle in damno sit<sup>34</sup>.

神の愛と、キリスト教の民と私たち皆の救いのため、この日をもって、神が知性と能力を私に与える限り、一般に兄弟がそうあるべきように、私は弟シャルルをあらゆる折に援助する。ただし、弟も私を同様に支えてくれることを条件とする。また、私はロタール<sup>35</sup>と、弟のシャルルに不利になると思われるようないかなる取り決めも行わない<sup>36</sup>。



ルイ<sup>37</sup>

そして、シャルルが、同じ内容を古ライン・フランク方言で以下の通り語る。

In godes minna ind in thes christanes folches ind unser bedhero gehaltmissi fon thesemo dage frammordes so fram so mir got geuuizei indi mahd furgibit so hal-dih thesan minan brudodher soso man mit rehtu sinan brudodher scal in thiuh thaz er mig so sama duo indi mit ludheren in nohheiniu thing ne gegango the minan uillon imo ce scadhen uuerdhen.

当時、これらゲルマン系・ロマンス系の両言語（古ライン・フランク方言とガロ・ロマンス語）がヴォージュ山脈を隔てて分岐していたことを示す証拠とも言えよう。実際、9世紀には、ゲルマン側とフランス側の民族の間で言語が明確に異なる様相を示していたことになる<sup>39</sup>。ヴォージュ山脈は結果的に、西に



シャルル

フランス語の萌芽、東にドイツ語の芽生えに挟まれる、極めて越え難い自然の境界線をなしていたわけである<sup>40</sup>。



<http://www.takamocori.info/entry/2018/04/16/133916>

## 1-2. イングランド



アングロサクソン年代記（ピーターバラ本）の第1頁

『アングロ・サクソン年代記』（Anglo-Saxon Chronicle）は、アルフレッド大王の治世（9世紀末）に編纂が始められた年代記形式の歴史書である。古い文書や民間伝承を収集し、同時代の記録（例：デーン人の侵攻）を付け加えている。その後、各地の教会・修道院で書き継がれ<sup>41</sup>、いくつかの写本（7写本+数個の断片）を合わせると、西暦0年から1154年までの記録が残されている。主な内容は、① 戦争・軍事など政治に関わるもの、② 教会・修道院なキリスト



アルフレッド大王（Alfred）

教に関するもの、③ 日食など自然現象 にまとめられる（例：「この年 3 月 28 日の鶏鳴暁を告げる時から曙まで月食が見られた<sup>42)</sup>」）。

注目すべきは、現存する資料には数年程度のずれが見られるということである<sup>43)</sup>。例えば、

A.D.794. Her Adrianus papa & Offa cyning forpferdon.

794 年 この年に、教皇アドリアヌスとオッフア（マーシャ王）が死んだ。

とあるが、史実として正しくは 796 年のことである<sup>44)</sup>。

あるいは、

A.D.812. Her Carl cyning forpferde.

812 年 この年に、カール皇帝が死んだ。

のように、812 年にカール大帝が亡くなってと記されているけれども、歴史的に正しいのは 814 年である。こうした年代表記の不正確さはあるものの、歴史的記録としての価値を『アングロ・サクソン年代記』が有していることは疑う余地もない。近年になって、レプトン (Repton) 教会でヴァイキングが越冬したことを示す遺跡の本格的な調査が行なわれ、実際に多くの証拠が発見されている<sup>45)</sup>。史実として、デーン人の首領グスルムが率いるヴァイキングの大軍がノーサンブリア (Northumbria) のリンゼイ (Linsey) からトレント (Trent) 川を遡上してダービシャー (Derbyshire) のレプトンに陣営を構築し、そこで越冬したという事実が裏付けられたことになる。『アングロ・サクソン年代記』の記述では次のように描写されている。

A.D.875. Her for se here from Lindesse to Hreopedune, & þær wintersetl nam.

875 年 この年に、デーン軍はリンゼイからレプトンへ向かい、そこで越

冬宿営をした。

ところで、『アングロ・サクソン年代記』は、キリスト教国たる英国の年代記であるから、その記述の出だしは西暦紀元元年から始まっている<sup>46</sup>。紀元元年から5世紀くらいまでの記録は極めて概略的で、例えば、

A.D.30. Her wæs Crist gefulluhtud.

30年 この年に、キリストが洗礼を受けた。

など1・2行のものが大半を占める。ゲルマン民族の1種族アングル族が登場し始める443年あたりから年代記としての記述が本格化してくる。『年代記』の転換点として挙げられるのが787年であろう。この年、デーン人（北歐のゲルマン諸種族の総称<sup>47</sup>）が初めてイギリスに来寇したことが記録されている。

イングランド七王国のウェセックス王、アルフレッド大王（849-899年、在位：871-899年）は、878年エディントンの戦いで勝利をあげ、バイキング（北歐のスカンディナヴィア人）との境界を画定（ウェドモアの和約）、デーン人首長グスルム（Guthrum）をキリスト教に改宗させた。以後バイキングの占拠地をデーンロー Danelaw 地方（デーン人の法・慣習の行われる地域）にとどめ、アルフレッド大王はイングランド統一の基礎を築いた。約100年続いていたデーン人（北歐ヴァイキング）の侵攻を食い止め、アルフレッド大王は衰退したイングランドのキリスト教文化を復興したことで知られている。彼の文化事業の一環が『アングロ・サクソン年代記』の編纂なのである。

1066年、ノルマンディー公ギヨーム2世はヘイスティングズの戦い（Norman Conquest）に勝利し、ウィリアム1世としてノルマン朝を開くわけである<sup>49</sup>。この間、イギリス本土の各王国の歴代の王はデーン人の侵略に対する防戦にばかりきりであった<sup>50</sup>。こうしてイギリスはノルマン（デーン）人により支配されることになるのである。この時期、ノルマン（デーン）人はキリスト教に改



ノルマンディー公ギヨーム2世によるイングランドの征服

宗しておらず異教徒として記述されている。さて、先に挙げた「ウェドモアの和約」(878年、the Treaty of Wedmore、ノルマン人の居住地をデーンローに限るという条約)で、デーン人の首長グズルムがアルフレッド大王<sup>51</sup>、および、エドワード王(King Edward)と取り交わした文書の中にも、ゲルマン人の民族的異教信仰あるいは元来のゲルマン民族による慣習が垣間見える。エドワード王とグズルムとの間で結ばれた協定の前文に、ゲルマン人の異教の慣習を直接的に禁じる箇所が出てくる。

#### EDWARD and GUTHRUM

Ðæt is ærest, þæt hig gecwædon, þæt hí ænne God lufian woldon & ælcne hæþendom georne aworpen.

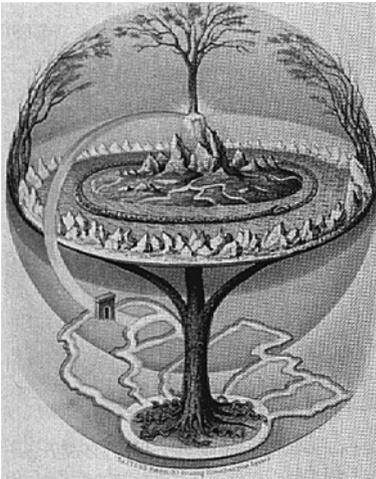
#### エドワードとグズルム

最初に(審議員たちは)以下のことを述べた、すなわち、私たちは唯一の神を愛し、どんな異教的な慣習も懸命に拒むということ。

引用部の「私たちは唯一の神を愛し、どんな異教的な慣習も懸命に拒む」という箇所の中に含まれる hæþendom「異教的な慣習」とは、この文脈ではゲルマン民族に特有の異教的慣習を指していることは確かである。10世紀にもなり、

あえてこうしたゲルマン的異教の慣習に触れて禁止する文言を含ませるということは、実際にゲルマン民族的異教文化がまだまだ慣例的に行われていたことを示していると言えよう<sup>52</sup>。アルフレッド大王をはじめ、彼以降のアングロ・サクソン人の王やキリスト教聖職者たちの努力で、ゲルマン民族の信仰を行っていた異教徒のデーン人を当時のイギリス社会へ順応するよう促し、アングロ・サクソン人によるキリスト教国家としての礎が次第に築かれていった。

### 1 - 3. 北欧



北欧神話に登場する世界樹ユグドラシル（古ノルド語 Yggdrasil）

北欧神話・英雄伝説の集成『エッダ』にルーン文字に関する記述が出てくる<sup>54</sup>。北欧神話の世界では、オーディンがルーン文字を発明したとされており、「オーディンの箴言」の中に「我はルーン文字を読み取り、呻きながら読み取り」という場面がある<sup>55</sup>。これは、主神オーディンがトネリコの世界樹ユグドラシル（宇宙の中心にあるとされている<sup>56</sup>）に自ら9夜吊り下がり、我が身を槍で傷つけ、この修行・苦行を経て魔法の文字であるルーンを取得したという

シーンである<sup>57</sup>。次のような詩が『エッダ』にある<sup>58</sup>。

私は知っている 私が  
9日9夜にわたって  
風吹きすさぶ樹に吊り下がり  
槍に傷つき 私自身が  
オーディン つまり私自身に  
私をいけにえとして  
それがいかなる根から発しているか  
知るひともない

Veit ek, at ek hekk  
vindga meiði á  
nætr allar níu,  
geiri undaðr  
ok gefinn Óðni,  
sjalfr sjalfum mér,  
á þeim meiði,  
er manngi veit  
hvers af rótum renn.

パンも角杯も  
恵まれぬまま  
私は下をうかがう  
私はルーンをつかみあげた  
うめきつつ つかみ  
それから大地に落ちた

Við hleifi mik sældu  
né við hornigi;  
nýsta ek niðr,  
nam ek upp rúnar,  
æpandi nam,  
fell ek aftr þaðan.

一般に、北欧にはゲルマン伝統の神々の神話が保持されている。アイスランドは大陸から遠いため、キリスト教の伝来も遅く、そのためにゲルマンの伝統的精神が保持される傾向にあった。『エッダ』などの中で、キリスト教の影響を受けていないゲルマンの英雄の姿が実際に描かれている。このように北欧神話は、北欧におけるキリスト教化（11-12世紀）以前の宗教、および、アイスランドを含むスカンディナヴィアの信仰・伝説で構成されている。一方、北欧以外のゲルマン人は、比較的早い時期からキリスト教化が進んだため、民族独自の神話・宗教を示すものがほとんど残っていない<sup>59</sup>。

今日、私たちは、ルーン文字と言えば「ヴァイキングが用いた文字<sup>60</sup>」というイメージをもっている。確かに、現存する銘文の多くはヴァイキングが活躍した中世の時代のものであるが、文字そのものの歴史は中世よりもはるか以前、ローマ帝国の時代にまで遡る。考古学の裏付けもあり、現在わかっている最古のルーン文字は紀元後2世紀のものであると言われている<sup>61</sup>。ゲルマン人がキリスト教化されて<sup>62</sup>、教会が彼らにローマの学問をもたらすまで、彼らは読み書きができない非識字の状態であったであろうが、それにしてもこの描写は事実をやや単純化しすぎていると指摘せざるを得ない。少なくともゲルマン人の一部は、ルーンと呼ばれる彼ら自身の文字体系をもっていたからである。この文字の系譜については種々の議論があるが、一般的に、アルファベット体系の1変種であることは間違いない<sup>63</sup>。

ローマの文化とは深い森を隔て、北方の地に住んでいたゲルマン人 — 一般

的には今もどうしてもこのようなイメージが先行する。ゲルマン民族のうち、いくつかの部族はヨーロッパ北方から黒海沿岸に移り住んでおり、大西洋から黒海までの広い範囲でローマ帝国と国境を接していた。つまり、ゲルマン人は実はかなり古くからすでにローマ文化圏に隣接しており、恒常的にローマ人と盛んな交易があったのである。地理的・歴史的な環境を考えれば、ルーン文字はローマ文化やキリスト教などの高度な文明圏と接触し続けたことは確かだが、その内実はいかなるものであったのだろうか。宗教的側面に注目すれば、11世紀頃のものと思われる、北欧の本来的な自然信仰の墓地と並んで、キリスト教の墓地の跡が発掘されている。この頃が、昔からの信仰とキリスト教の共存した時代なのだろう。

異教が支配していた北欧へキリスト教が勢いをもって伝播していくのは11-12世紀の頃である。それと同時に、7-8世紀頃に全盛期を迎えていたルーン文字も<sup>64</sup>、次第にその地位をラテン文字に譲ることになる。キリスト教の布教がラテン文字の普及と相関し、ルーン文字は異教のシンボリック的存在として次第に排除されていくのである。この移行の時期、ルーン文字とラテン文字が同時に彫られた銘文がいくつも発見されている<sup>65</sup>。キリスト教がローマ帝国内で広がっていくにつれて<sup>66</sup>、同時に領土内でラテン文字が浸透していったプロセスである。宗教上の文書や公文書などの記録は重要な文字史料で、宗教の伝播・普及とともに文字文化が広がっていく過程は、その時代の人びとがどの文字に依存していたのかを理解できる最重要史料である。周知のとおり、今日のヨーロッパはラテン文字とキリスト教の文化圏とも言えるが、当然、最初からそうだったのではない。当初は少数者しか知らなかったラテン文字とキリスト教の拡大の歴史を理解することは、ヨーロッパの基層を理解するための必須の作業である。

## 2. 『聖書』の成立過程

Christus, der keine Sünde getan hat und in dessen Mund sich kein Betrug fand; der nicht widerschmähte, als er geschmäht wurde, nicht drohte, als er litt, er stellte es aber dem anheim, der gerecht richtet; der unsre Sünde selbst hinaufgetragen hat an seinem Leibe auf das Holz, damit wir, der Sünde abgestorben, der Gerechtigkeit leben. Durch seine Wunden seid ihr heil geworden<sup>67</sup>.

キリストは罪を犯さず、その口には偽りがなかった。ののしられても、ののしりかえさず、苦しめられても、おびやかすことをせず、正しいさばきをするかたに、いっさいをゆだねておられた。さらに、わたしたちが罪に死に、義に生きるために、十字架にかかって、わたしたちの罪をご自分の身に負われた。その傷によって、あなたがたは、いやされたのである。

「第一ペテロ」2:22-24 (口語訳)

ヨーロッパの言語・歴史を理解するにはキリスト教の知識は欠かせない。また逆に、キリスト教の歴史を知るためにはヨーロッパの諸文化を理解しないわけにはいかない。ゲルマン人の歴史的背景とローマ側の宗教文化を並行的に捉えるべく、中世のある時期の風景を比較してみよう。

ゲルマン諸部族が自らの国家を建設しようとしていた中世初期（ここでは紀元後2～4世紀を指すとする）は、キリスト教の教父たちが、この宗教がヨーロッパに根付く基本的な作業を行っていた時期でもある。特に重要な役割を果たした人物として次の2人の名前が挙げられよう。オリゲネスとエウセビオスである。



オリゲネス（185年-254年）：キリスト教が迫害されていた時代、アレクサンドリアにキリスト教学校を設立し教鞭をとった。彼は新プラトン主義の影響を強く受けており、言わばギリシア思想による聖書解釈を試みた。聖書を理解する方法としては、その記述を字義通りに捉えるのではなく、何らかの比喩として解釈する比喩的聖書解釈の手法をとった。キリスト論において、父なる神に完全な神性を認める一方で、子なる神の神性を父より少ないと考える。この考え方は、子は一被造物であり神の意志に由来するという見方をするアリウス主義の主張に近いところがある（オリゲネスの学統がアリウス主義の根源になっていると言われ方をされることもある）。



エウセビオス（260年頃～339年）：初期キリスト教の代表的神学者オリゲネスの学統を

受け継ぐパンフィロスを師とし、パンフィロスと共に『聖書』正典の確定に関わる。キリスト教の迫害をパレスチナやエジプトで目撃している。主著（イエス・キリストに始まりコンスタンティヌス帝時代に至るまでの教会とキリスト教徒の歴史）の執筆で名高い。ただし、この著作が西洋精神史において反ユダヤ主義（キリスト教徒によるユダヤ人の迫害・差別）の形成に関わったことは事実である。例えば、『教会史』第二巻（1-1）で「ステファノは主殺したち（ユダヤ人のこと）によって石打ちの刑に処された」と記している（エウセビオス 2004:397）。別の著作『コンスタンティヌスの生涯』でもエウセビオスは、コンスタンティヌス帝という帝国の権力の口に自分の反ユダヤ主義の立場を仮託していると思われる場面がある（エウセビオス 2004:399）。なお、反ユダヤ主義を唱える常套句として知られている箇所が「テサロニケの信徒への手紙一（2:15）」で、そこには「ユダヤ人たちは、主イエスと預言者たちを殺したばかりでなく、わたしたちをも激しく迫害し、神に喜ばれることをせず、あらゆる人々に敵対し[….]」とある。

この2人のような教父が『聖書』の成立・発展に関して寄与した貢献は計り知らず、例えば「いっさいの新約聖書本文の資料が消滅したとしても、なお、引用だけで十分、新約聖書全体を再構成できるほどである（In der Tat sind diese Zitate so umfangreich, daß, wenn nun alle Quellen für unsere Kenntnis des neutestamentlichen Textes verlorengegangen wären, sie doch allein ausreichen würden, um praktisch das ganze Neue Testament zu rekonstruieren<sup>68</sup>.）」と言われるくらい、教父が『聖書』から引用した箇所は夥しい数であった<sup>69</sup>。また、教父のテクストの価値は一般的に次のような見方をされているほどであった：「教父の著作は、その当時の写本にあった異読を特に引用することがある。このような情報は、その異読が流通していた特定の時と場所を証明してくれるので極めて重要である。[…] 新約聖書写本の場合と同じく、教父の著作もまた筆写の過程で変形されているからである：（Gelegentlich geschieht es, daß ein Kirchenvater eigens eine oder mehrere Varianten zitiert, die in Handschriften seiner Zeit vorhanden waren. Ein solcher Hinweis ist von größter Bedeutung für den Nachweis der Verbreitung einer solchen Lesart in einer bestimmten Zeit und Gegend. [ … ] Wie das bei den neutestamentlichen Handschriften auch der Fall war, sind auch die Schriften

der Väter im Laufe handschriftlicher Überlieferung verändert worden<sup>70)</sup>。すなわち、教父が書いたテキストには、『聖書』の異読に関わる決め手となることもあるくらいの価値があったのである。

キリスト教の地位は紀元3-4世紀頃にもなるとローマ帝国内で高まっていく。「最上の行いとはすべて神の思し召しであり神の命令を実行するのが人間なのだ」(コンスタンティヌス「聖者の集いへ」)という勢いである。つまり、キリスト教がユダヤ教の社会から抜け出し、ギリシア・ローマ的世界の中で発展を遂げようとしていく時期である。キリスト教の神話とヘレニズム時代のいわゆる密儀宗教の神話とを比較し、一体どういう点が極めてよく似ていて、どういうところが本質的に違うのか検討することは今日なお本質的な課題である。キリスト神話論の立場では、福音書のイエス・キリストの話はすべて神話であると考えられる。すなわち、『新約聖書』の福音書に記されたイエスの物語は、同時代の「神が死んで復活した、だからその神を信じれば救われる」というような神さまの話とほぼそっくり似た話である。ゆえにイエス像は、かつてのあの時代のユダヤでユダヤ教の伝統に立脚しながら同時代のヘレニズム思想の影響を受けてできた神話であるという考え方である。確かに、イエス・キリストが歴史的にどこまで実体を把握できるかは極めて曖昧な問題ではある。しかしながら、『新約聖書』におけるキリストの救済論と、ヘレニズム時代にいわばキリスト教のライバルみたいにしてヘレニズム世界やローマ帝国にどんどん広がっていった密儀宗教の神話を本格的に比較する作業は欠くべからざる課題である。

かつてのローマ帝国では、皇帝の意向など「この世的な」権威にしてもすべては神の思し召しと捉えんとするコンスタンティヌス帝により、キリスト教徒の優遇策がとられていた。コンスタンティヌス帝はキリスト教徒であることが現世でも利益になるという政治をしたのである。ただし、4世紀(キリスト教と異教の抗争の最後の世紀)半ば頃、ギリシア・ローマの宗教は邪教(異教 paganus: もともとはギリシア・ローマ教徒に対して)として排斥されていた

わけではなかった。実際、軍や政府の要職に、キリスト教徒でなければつけないということはなく、キリスト教の側の言う異教徒はいまだ高官たちの中にも少なくなかった。まさに「ミラノ勅令」(313年)によりキリスト教が公認され「今日以降、信ずる宗教がキリスト教であろうと他のどの宗教であろう変わりなく、各人が自分が良しとする宗教を信じ、それに伴う祭儀に参加する完全なる自由を認められ」、併せて古来のギリシア・ローマの宗教の信徒にも「キリスト教徒に認められた信教の完全なる自由は、他の神を信仰する人にも同等に認められるのは言うまでもない。(略)いかなる神でもいかなる宗教でも、その名誉と尊厳を損なうことは許されるべきではない。(略)」と謳われている。

後の世に背教者ユリアヌス (Julianus apostate) として知られる次代の皇帝ユリアヌス帝は時代のこの流れに逆行して古代の神々を再び最高位に据えようとした。ユリアヌス帝が行ったことは、ギリシア・ローマ伝統の宗教を復活しキリスト教徒によって破壊されていた神殿を再建することであった<sup>71</sup>。また、ユリアヌス帝は東方神ミトラ神へのいけにえの儀式を盛んに行った(ミトリダテスという名前は「ミトラによって授けられた」という意味だが、彼はパルティア王であり(120-63 B.C.)、ローマとの戦いに勝利し、小アジア半島とオリエントの人々からはミトラの化身とか、「大王」とか救世主と見なされていたという。その中にはローマの支配に抵抗していたユダヤ人たちも含まれていた)。ミトラ教はローマ帝国の領土においてかなり広範に流布した宗教で、初期キリスト教とローマ帝国の国教の地位を争うほどに古代においては優勢な宗教であった。ローマ帝国治下のミトラ教が独立した宗教であったことは歴史的妥当性をもって確認できる。いずれにしてもミトラ教はヘレニズムの文化交流を通じて地中海世界に入り主にローマ帝国治下で紀元前1世紀より5世紀にかけ大きな勢力をもつ宗教となった。確かにユリアヌス帝は、キリスト教を禁止したわけではないが、聖職者のもっていたさまざまな特権をとりあげた。当時すでにキリスト教会内部では教義をめぐる宗派争いが多く、ユリアヌス帝はこの点を批判したのである。ところが、このユリアヌス帝の試みが挫折したことで逆

にキリスト教こそ永遠不変の教えであるという考え方が広まることとなった。ペルシア戦役途上のユリアヌス帝を見舞うのは次の事件である。

「(ユリアヌスの) 遠征軍はペルシア人を彼らの冬の首都であるクテシフォン城外で打ち負かしたが、その街の占領にはとりかからず、ひとまず北へ退いて増援隊と合流することにした。その旅の途中の戦いでユリアヌスは負傷した。噂によれば、その一撃を与えたのはペルシア人ではなく、『迷いからさめた』キリスト教徒だったという<sup>72)</sup>。」

キリスト教の論理で言えば、「神が皇帝の権威と権力を与えたから彼は帝位に就いているのであって、その神が、船団炎上に敵前撤退に炎天下での敵の襲撃という、誰の眼にも明らかな形で皇帝に罰を与えたからには、臣下にはもはや皇帝に従う義務はない<sup>73)</sup>」。

ローマのキリスト教が従来の異教と戦う時代のありさまを歴史小説『ローマ人の歴史』（塩野 2005:295）から引用すると、

テオドシウス帝は問うた：「ローマ人の宗教として、あなた方は、ユピテルを良しとするか、それとも、キリストを良しとするか」。テオドシウス帝は元老院議員に対し、形式は質問だったが、内実は選択を迫ったのである。こうして、1千年以上にわたってローマ人から最高神と敬われてきたユピテル（ジュピター）に、まるで生身の人間に対してのように有罪が宣告された。そして、ローマ人の信仰の座には、ユピテルに代わってキリストが就くことが決まったのである。これは、ローマ帝国の国教は、以降、キリスト教になるということの宣言であった。またこれは、ローマの元老院という多神教の最後の砦がキリスト教の前に落城したことを意味する。建国の当初からローマ人とともに歩んできた元老院は1141年後にキリスト教の前に降伏したのである。

ここに引用した段落の出だし、テオドシウス帝のことばから想定されることは、ローマにおいてそもそも神話と宗教の区別が判然としないうという事実である。神話における最高神ユピテルが諸々の神々とともに宗教界でも活躍する。このことは何もローマに限った話ではない。『旧約聖書』で展開される物語は言ってみればイスラエルの民が紡ぎ出す神話の歴史的記述である。「万軍の主が…」によって想起される光景は、イスラエルの民が自らの神に率いられ他民族と戦闘を繰り広げる場面であり、これなどイスラエルの民族誌と呼んでよいものである。身近な例を挙げれば、まさに神がかつたはたらきとも言えよう日本の神武東征に見られる「神＝天皇」という構図も、宗教が生まれる土壤に己が民族の英雄列伝なるものがあることを示す好例と言えよう。

キリスト教は、ナザレのイエスを救世主キリスト（メシア）と信じ、旧約聖書に加えて、新約聖書に記されたイエスや使徒たちの言行を信じ従う伝統的宗教。紀元1世紀、イエスの死後に起こった弟子の運動（初期キリスト教運動）が、その直接的な起源である。ユダヤ教の流れをくむ一神教であって、神には、同一の本質をもちつつも互いに混同し得ない区別された三つの位格（父なる神と子なる神（＝キリスト）と聖霊なる神）がある（三位一体）とする。一方で、神概念の多神論的解釈、キリストの人性のみか神性のみしか認めない、聖霊を神の活動力とする、キリストを被造物とする、キリストの十字架（＝贖罪死）と復活を認めない、などを異端として排除する。ただしカトリックの聖人崇拜（崇敬）に多神教の性格を指摘する見解もある。新約聖書の他、ユダヤ教の聖典でもある旧約聖書を教典とする。旧約聖書の範囲は、紀元前から1世紀までの四世紀の間に成立し、ヤムニア会議（1世紀末にユダヤ教の正典目録を定めた）で排除されたユダヤの宗教的文書の取り扱いをめぐり、教派によって異なる。カトリックでは、これらの文書を第二正典と称する場合があるが、トリエント公会議では第二正典という用語を一切用いずに、完全な正典として定義している。東方正教会においては第二正典という用語はまったく用いない。プロ

テスタントではこの文書群に何らかの価値を認める教会もあれば、全く無視する教会もある。後者の教会ではこれらの文書を旧約外典と呼ぶ。また、新約の諸文書の位置付けも、わずかではあるが他と異なる教団もある。これらの分類（正典化）は古代末期に成立した。キリスト教の理論的發展を基礎付けたのはパウロ書簡およびヨハネ福音書である。初期の教義はユダヤ教の律法を基礎としたイエスや使徒の言行から發展した。最初期のキリスト教はユダヤ教との分離の意識をもたなかったとする学説が現在は主流を占める。現在、キリスト教の教派はおもに東地中海沿岸およびロシアに広まる東方正教会、ローマ教皇を中心とするカトリック、カトリックに対する宗教改革から発生したプロテスタントがある。ほか、431年のエフェソス公会議で異端宣告されたイラクのアッシリア教会（ネストリウス派）およびその分枝であるインドのトマス派教会（マラバル派）、451年のカルケドン公会議で異端宣告されたキリスト単性論に属するエジプトのコプト正教会や、その姉妹教会エチオピア正教会、シリアのシリア正教会（ヤコブ派）や、元小アジア現在はコーカサス地方のアルメニア使徒教会などの東方諸教会と呼ばれる教派もある。キリスト教は、紀元1世紀の30年代に、ローマ帝国属州のユダヤと、ヘロデの一族が統治していたガリラヤ地方で生まれた。ガリラヤのナザレ出身のイエスは、ユダヤ人であり、ユダヤ教徒として育ち成人した。イエスの説く宣教の内容、すなわち、愛、神の国、律法などは、いずれもその時代のユダヤ教の用語であり概念であった。

かつて、キリスト教が迫害されていた時代、紀元後まもなくの2-3世紀の頃、ギリシアの教会教父オリゲネス（185-254年）はアレクサンドリア（エジプト）にキリスト教学校を設立し教鞭をとっていた<sup>74</sup>。オリゲネスの功績は、私たちにとって何より、2世紀後半のキリスト教の正典文書に関して私たちが知ることのできるリストを残してくれている点である<sup>75</sup>。何しろ、「七十人訳聖書」の翻訳の原本となったヘブライ語テキストは現存していないわけであるし、「七十人訳聖書」の最初のテキストであると断定できるギリシア語テキストも今や残っていないのである<sup>76</sup>。オリゲネスは『旧約聖書』を構成する文書

名として以下のリストを挙げてくれており<sup>77</sup>、「ヘブライ人の言い伝えどおり、正典文書は22冊であることを知っておくべきである。この22は彼らの文字の数と同じである」と明言している<sup>78</sup>。

ΚΑΙ ΔΕ ΘΗΤΩΣ ΜΗΡ  
 ΜΑΚΑΙ Η ΑΟΙ ΠΗΕ  
 ΠΙΜ ΣΙΑ ΚΑΙ ΓΥΝΗ  
 Η ΑΝΑΡΕΣΗ ΤΩ ΕΑΥ  
 ΜΕΙ ΚΑΙ ΣΙ ΜΕΥΣ ΣΙΑ  
 ΤΙΑ ΣΤΗ ΝΚΑΙ Η ΡΕΣ  
 ΤΩ ΕΑΣΙΑ ΣΙ ΤΟ ΠΡΑ  
 ΓΜΑΚΑΙ ΕΠΟΙ ΗΣ  
 ΟΥ ΤΩΣ  
 ΚΑΙ ΑΝΘΡΩΠΟΣ ΗΝ  
 ΙΟΥΔΑΙΟΣ ΕΝ ΣΟΥ  
 ΣΟΙ ΣΤΗ ΠΟΛΕΙ ΚΑΙ  
 ΟΝΟΜΑ ΚΥΤΟ ΜΑΡ  
 ΔΟΧΑΙΟΣ ΟΤΟ ΥΙΟΝ  
 ΙΟΥ ΤΟΥ ΣΕ ΜΕ ΣΙ ΟΥ  
 ΙΟΥ ΚΑΙ ΣΑΙ ΟΥ ΕΚ  
 ΣΥΝΗ ΣΕ ΝΙΑ ΜΕΓ  
 ΟΣ ΗΝ ΑΙ ΧΜΑΛΙΩ  
 ΤΟΣ ΕΣΤΗ Η ΜΗΝ  
 Η ΧΜΑΛΙΩ ΤΕΥΣ ΕΝ  
 ΝΑ ΕΟΥ ΧΟΔΟΝ Ο  
 ΣΥ ΕΑΣΙΑ ΕΥΣΕΑ  
 ΕΥΛΩΝ Ο ΣΚΑΙ ΗΝ  
 ΤΟΥ ΤΩ ΙΑΙ ΣΟΥ Ε  
 ΠΤΗΘΥΓΑΤΗ ΓΑΜΙ  
 ΝΑ ΔΑ ΕΑ ΔΕ ΜΟΥ  
 Η ΑΤΡΟΣ ΚΥΤΟΥ ΚΑΙ  
 ΤΟΥ ΝΟΜΑ ΚΥΤΗΣ  
 ΕΣΘΗ ΕΝ ΔΕ ΤΩ  
 ΜΕΤΑ ΑΛΛΑ ΣΙΑ ΤΩ  
 ΤΗΣ ΤΟΥ ΣΟΝ ΕΙΣ  
 ΕΠΕΑΣΥΣ ΕΝ ΑΥΤΕ  
 ΕΑΥΤΩ ΕΙΣ ΓΥΝΑΙ  
 ΚΑΚΑΙ ΗΝ ΤΟ ΚΟΡΑ  
 ΣΙ ΟΝ ΚΑΙ Η ΤΩ ΕΙΣ  
 ΚΑΙ ΟΤΕ Η ΚΟΥΣ ΕΝ  
 ΤΩ ΤΟΥ ΕΑΣΙΑ ΕΩΣ  
 ΠΡΟΣ ΤΑ ΓΜΑΣΥΝ Η  
 ΧΘΗ ΣΑΝ ΠΗ Η ΕΩ  
 ΑΙ ΝΥΠΟΧΕΙΡΑ ΤΩ

シナイ写本 (British Museum 所蔵) : 「エステル記」(2:3-8)<sup>79</sup>

口承で伝えられていた物語が写本に書き下ろされ、そして後代、写本から印刷本へというメディアの交替が起こる。本章の目的は、今日、私たちが目にしている『聖書』がどのようなプロセスを経て現在の姿になったのかを解き明かすことである。さて、『聖書』本文の正しい意味内容を確定する正文批判

(Textkritik) という校訂の仕事は、個々の写本のテキストを緻密に読み解いていく作業である。「七十人訳聖書」に即して言えば<sup>80</sup>、諸写本を照合し、そこに書かれているテキストをヘブライ語原典に文献学的・批判的に適用するという手続きを指す。具体的には、印刷術の発明以前のあらゆる「七十人訳」写本を、印刷本となっているテキストと照合し、写本と刷本の読みが異なる場合には、その違いを明示する。そして照合されたもの<sup>81</sup>をすべて一覧できるようにする。こうした校合作業により、読みの揺れが見られる多数のギリシア語写本（アレクサンドリア写本など）が照合され、併せてラテン語・コプト語等の読みも確認され、正文が確定していくわけである<sup>82</sup>。



コプト語パピルス（4世紀）の「ヨハネによる福音書」

「七十人訳」の写本の中でも、ギリシア語で書き記された以下の3つの大文字写本（4世紀～5世紀）は重要である<sup>83</sup>。（1）パチカン写本<sup>84</sup>（4世紀、

バチカン図書館、[https://digi.vatlib.it/view/MSS\\_Vat.gr.1209](https://digi.vatlib.it/view/MSS_Vat.gr.1209)）、（2）シナイ写本（4世紀、大英図書館ほか、<http://www.codexsinaiticus.org/en/>）、（3）アレクサンドリア写本（5世紀、大英図書館、<https://www.bl.uk/collection-items/codex-alexandrinus>）のことである。ただ、いずれの写本も完全ではなく、欠損があり、例えば「バチカン写本」で「七十人訳聖書」の復元を試みる場合でも、その欠落箇所は「シナイ写本」で補われ、これら2つの写本で同じ箇所が欠落している時は「アレクサンドリア写本」で補われるといった具合である<sup>85</sup>。



アレクサンドリア写本

ところで、「シナイ写本」に関しては、この写本が救われるに至る奇跡的な物語がある。

1844 unternahm der junge, noch nicht dreißigjährige Leipziger Privatdozent Tischendorf eine ausgedehnte Reise in den nahen Osten, um nach Bibelhand-

schriften zu suchen. Bei einem Besuch des Katharinenklosters am Berg Sinai sah er zufällig einige Pergamentblätter in einem Papierkorb, mit denen der Ofen im Kloster angeheizt werden sollte. Bei näherer Nachprüfung zeigte sich, daß diese Blätter zu einer Septuagintahandschrift in einer frühen Unziale gehörten. Er zog nicht weniger als 43 Blätter aus dem Papierkorb, und ein Mönch bemerkte gelegentlich, daß zwei Körbe voll von ähnlichem Abfallpapier schon verbrannt worden seien. Später, als man Tischendorf andere Teile vom selben Codex zeigte (die das ganze Buch Jesaja und 1. und 4. Makkabäer enthielten), machte er die Mönche darauf aufmerksam, daß solche Dinge zum Verheizen zu kostbar wären. Die 43 Blätter, die er mitnehmen durfte, enthielten Teile aus 1 Chronik, Jeremia, Nehemia und Esther, und als er nach Europa zurückkehrte, übergab er sie der Universitätsbibliothek Leipzig, wo sie heute noch liegen. (Metzger 1966:43)

1844年、ティッシェンドルフ (Constantin von Tischendorf) はまだ30歳にならないライプチヒ大学の私講師であったが、聖書写本を求めて、近東一帯にわたり広く旅行した。彼がシナイ山のカタリナ修道院を訪れた時、たまたま修道院のかまどにくべる紙屑にまじって、屑箱の中に皮紙が入っているのを目にした。調べてみたところ、この皮紙は、初期ギリシア語大文字書体で書かれた「旧約聖書70人訳」の一部であることがわかった。彼は屑箱からこの皮紙を43枚取り出したが、修道士がふともらしたところでは、同様の古ぼけた皮紙をすでに屑箱2杯も (!) 燃やしてしまったということであった。後にティッシェンドルフが同じ写本の他の部分を見せてもらった時 (それは「イザヤ書」と「マカバイ記」1・4の全部であった)、彼はこのようなものは極めて重要であるから、火にくべてはならないと注意した。彼が許可を得て譲り受けた43枚は、「歴代誌」上・「エレミア書」・「ネヘミヤ記」・「エステル記」の部分であった。ヨーロッパに帰ってのち、彼はそれをライプチヒ大学図書館に預けた。これらは現在もここに保存さ

れている。

このエピソードまではいなくても、写本が今日まで残っているという状況はかなり難しいものであると思わざるを得ない。

Die Werke verschiedener antiker Autoren sind uns in der dünnsten vorstellbaren Überlieferungskette erhalten. So ist etwa die umfangreiche römische Geschichte des Velleius Paterculus in einer einzigen unvollständigen Handschrift erhalten, aus der die edition princeps veranstaltet wurde – und diese einzige Handschrift ging im 17. Jahrhundert verloren, nachdem sie von Beatus Rhenanus aus Amerbach abgeschrieben worden war. Selbst die Annalen des Tacitus sind, wenigstens was die ersten sechs Bücher betrifft, nur in einer einzigen Handschrift aus dem 9. Jahrhundert erhalten. […] Im Gegensatz dazu ist der Textkritiker des Neuen Testaments durch die Reichhaltigkeit seines Materials verwirrt. (Metzger 1966:35)

古代のある作家たちの作品は、いわばごく細い糸で私たちに伝えられているにすぎない。例えばヴェレイオス・パテルクロスによる『ローマ史大観』はわずか1つの、それも不完全な写本で現代に伝えられているのみである。この写本を元にして *edition princeps* (基定版) が出されたが、この唯一の写本もアメルバッハのベアトゥス・レナヌス (Beatus Rhenanus) が写した後、17世紀に散逸してしまった。有名な歴史家タキトゥスの『年代記』ですら、その最初の6巻に関していえば、9世紀の写本が1つあるにすぎない。[……] このような数字と対照してみれば、新約聖書の本文批評は豊かな資料に当惑するほどである。

### 3. 正典としての『聖書』の編集プロセス

聖書『正典』はキリスト教では信仰の基本とされる絶対的なものである。それにもかかわらず、このテキストを厳密な意味で誰が採択・編集したのか、その歴史は意外にもあまり明かにされていない。専門家たちには、キリスト教の初期には種々の福音書やこれに類するものが出回っていた事実はもちろん知られている。この章では、4世紀の聖書編纂の会議で、諸文書のうちどれが『聖書』として採択されていき「神の啓示によってなされたもの」として宣言され、権威と正当性をもつようになっていったのか、そのプロセスを探る。

そもそも、キリスト教の『聖書』は全体としては大変、複雑な内容を含み込んでおり、全体をつなぐ一本の論理が通っているとは言えない。例えばイスラム教の『コーラン』のように、一人の人物が啓示を授かりその言葉を記し成立したというわけではない<sup>87</sup>。長い歳月をかけ多くの人の手を経て、記述・筆写・編集がなされたものなのであり、そのプロセスで時代の影響を色濃く受けている<sup>88</sup>。聖書の正典が最終的にどのようにして成立したのか、世界のどんな出来事が聖書本文に反映され、いかに聖書の物語を形作っているのかを解明することが本節の目標である<sup>89</sup>。

『聖書』内部には、いろいろな立場が内包されており、その多様性はそのままの形で捉えるしかない。そして『聖書』全体を体系的に十分に理解するということは専門家でも難しい作業であると言える<sup>90</sup>。確かに『聖書』を何の導きもないままに読解していくのは困難である。次の有名なエピソード（「使徒言行録」8:26-35の下線部分）を出すまでもないほどであろう<sup>91</sup>。

「使徒言行録」主の天使はピリポ<sup>92</sup>に、「ここをたつて南に向かい、エルサレムからガザへ下る道に行け」と言った。そこは寂しい道である。ピリポはすぐ出かけて行った。折から、エチオピアの女王カンダケの高官で、女

王の全財産の管理おをしていたエチオピア人の宦官が、エルサレムに礼拝に来て、帰る途中であった。彼は、馬車に乗って預言者イザヤの書を朗読していた。すると、聖霊がピリポに、「追いかけて、あの馬車と一緒に向け」と言った。ピリポが走り寄ると、預言者イザヤの書を朗読しているのが聞こえたので、「読んでいることがお分かりになりますか (Verstehst du, was du liest?)」と言った。宦官は、「手引きしてくれる人がなければ、どうして分かりましょう (Wie kann ich, wenn mich nicht jemand anleitet?)<sup>93</sup>」と言い、馬車に乗ってそばに座るようにピリポに頼んだ。彼が朗読していた『聖書』の個所はこれである。「彼は、羊のように屠り場に引かれて行った。毛を刈る者の前で黙している小羊のように、／口を開かない。卑しめられて、その裁きも行われなかった。だが、その子孫について語れるだろう。彼の命は地上から取り去られるからだ。」宦官はピリポに言った。「どうぞ教えてください。預言者は、だれについてこう言っているのでしょうか。自分についてですか。だれかほかの人についてですか。」そこで、ピリポは口を開き、『聖書』のこの個所から説きおこして、イエスについて福音を告げ知らせた<sup>94</sup>。(新共同訳)

ピリポは思いがけず神様に導かれたというわけである。ピリポという1個人が考えもしなかったことを神様が考え、ピリポを通してそれをして下っているという。不思議な導きであり、目には見えない聖霊の働きにより演出された舞台のようである<sup>95</sup>。これを別の視点から考えると、『聖書』は現在の実用書や教科書のように読めば忽ちわかり、一義的な解釈のみを明示する狭義のテキストではないということも理解できる。これは今日の読書という概念で捉えようと、読んでもすぐにわからないテキストという位置づけに不可解な気持ちを抱くかもしれないが、『聖書』という神の言葉・行いを記した書物を容易に解読できないということは、むしろ当然のことと考えられてきた長い歴史も存在するのである<sup>96</sup>。

キリスト教の端緒の時期、キリスト教自身のアイデンティティーを確立するためには、「福音書」および「パウロ書簡」の編集は必要かつ欠くべからざる作業であった。つまり、キリスト教は、その成立期において言語・文字が重要な役割を担っていた宗教であったと言える。この関連で言えば、アメリカの聖職者・教育者ヘンリー・ファン・ダイク（Henry Van Dyke, 1852-1933）が示す次のような『聖書』観は興味深い。

Born in the East and clothed in Oriental form and imagery, the Bible walks the ways of all the world with familiar feet and enters land after land to find its own everywhere. It has learned to speak in hundreds of languages to the heart of man. 「東洋に生まれオリエントの形と象徴とを身に帯びて、『聖書』は全世界の道を慣れた足取りで歩き、国から国へと渡り歩き、どこにおいても自分の国を見出す。『聖書』はこれまでに何百か国語もの言葉で人びとの心に語りかけて来た」

キリスト教の歴史において、初期教会の信条（例えばニカイア信条<sup>97</sup>）が宣言されたのは、実に、『聖書』の正典が確立する以前のことであったのである。どの書を『聖書』の中に正式に入れるかどうかを決定する前に、すでに教会は教令を定めていたわけである<sup>98</sup>。つまり、教会の教父たちはまず、教会が何を信じるべきかを『聖書』の記述の一部を根拠に確定し、その後、そうした教義の内容を支持するような文書でもって『聖書』の残りの部分を埋めていたのである<sup>99</sup>。古代に書かれたユダヤ教・キリスト教の書は数多く<sup>100</sup>、『聖書』に含まれるようになった書よりも遥かに多くの書が存在していたのであった。モーセやイエスに関する書は非常に多くあり、しかもたくさんの版・翻訳があったのである<sup>101</sup>。

Metzger (<sup>2</sup>1968) の *The Text of the New Testament* 『新約聖書の本文研究』の刊行以来、半世紀が過ぎ、新約聖書の本文批評、例えば、ギリシア語写本、諸翻

訳、教父の証言などが新たに明るみに出て、多様な進歩が見られた。しかしながら、それでも『新約聖書』の本文の確定のプロセスは道半ばである。そもそも、本文批評は、原著者の本文に辿り着くことが最終目標であるが、この作業自体、可能かどうか疑わしく、少なくとも本文そのものが私たちが通常、思っているほど確かなものではないことを認識する必要がある。本文が確定されてはじめて、『新約聖書』の内容が真に理解できることになるわけである。

『聖書』の多くの部分は教会が宗教としての体制をもつ以前に書かれたものである。現存の教会という体制とは別に、『聖書』の本文に触れ『聖書』の精神を体感することは可能であろう。『聖書』の精神が人を動かして顕著な形をとったケース（例：シュヴァイツァー）でなくとも、歴史の知られざる1コマでの隠れた働きが、いかに力をもつものかは言うまでもない。人々の人生にどんな影響を及ぼし得ると考えられるだろうか<sup>102</sup>。

そもそも『聖書』は正典として存在することにその意義がある<sup>103</sup>。他の古典作品とは異なり<sup>104</sup>、人間の信仰生活の規範という意味である<sup>105</sup>。キリスト教において『聖書』の文書として選ばれたテキストのことを正典 Kanon という<sup>106</sup>。「正典」とは、ギリシア語（『新約聖書』の言語）のカノンの訳であり、この語はヘブライ語（『旧約聖書』の言語）のカーネー「葦」に由来する。「葦」はまっすぐ生育するので、ものの長さを計る棒、すなわち物差し（長さの単位）として用いられた。伝承・テキストが正典としてまとめられていく過程にはさまざまなはたらきがあり<sup>107</sup>、『旧約聖書』が正典としてまとめられたのは紀元後1世紀（紀元後90年）であり<sup>108</sup>、『新約聖書』が正典としてまとめられたのは紀元後4世紀のことである<sup>109</sup>。

『聖書』が正典化し1冊の書物となる来歴を辿る作業は、特に『新約聖書』の場合、興味深い<sup>110</sup>。すなわち、どの文書が正当な書とされ神の言葉とされるのか、どの書を単なる教育的な書とみなすのか、あるいは、どの書を異端として退けるのか、その過程を考察し、紀元後数世紀にわたり『新約聖書』がある種の意図をもって編纂されていった経緯を跡付けることが可能である<sup>111</sup>。

まずは根源的に遡って、文字が筆記されるようになっていくプロセスを辿ることから始めよう。

Die Papyrusherstellung war in Ägypten ein blühender Wirtschaftszweig, den die Papyruspflanze wuchs reichlich in den seichten Gewässern des Nil-Deltas (vgl. Hi 8, 11 › Kann Papyrus [Luther: ›Rohr‹] wachsen, wo es keine Feuchtigkeit gibt? ‹ Der etwa 4-4<sup>1</sup>/<sub>2</sub> m hohe Stengel der Pflanze, der im Querschnitt dreieckig und etwa so stark wie das Handgelenk eines Erwachsenen ist, wurde in Stücke von <sup>1</sup>/<sub>4</sub> bis <sup>1</sup>/<sub>3</sub> m Länge geschnitten. Jeder Abschnitt wurde in der Längsrichtung aufgespalten und das Mark in dünne Streifen geschnitten. Eine Lage davon wurde auf eine glatte Fläche gelegt – alle Fasern parallel. Darauf kam eine zweite Lage mit den Fasern im rechten Winkel zu denen der ersten. Dann wurden die beiden Lagen zusammengedrückt, bis sie ein Gewebe bildeten – ein Gewebe, das zwar jetzt so spröde ist, daß es manchmal zu Staub zerrieben werden kann, früher aber annähernd die Festigkeit von gutem Papier hatte. (Metzger 1966:3-4)

パピルスはナイル川デルタ地帯の浅い水際に大いに繁茂していたので、パピルス紙の製造は、エジプトで栄えた（「ヨブ」8:11：「沼地でもない所でパピルスが育とうか」）。この植物は4～5メートルほどの高さに達し、その茎の断面は三角形をなし、太さは人の手首くらいになる。この茎を30センチほどの長さに切り、さらに縦に切り開いてから、ずいを薄くそぐのである。これを平たい所に敷き並べて繊維が同一方向に並ぶようにする。次に、その上にもう1枚、繊維が下のものと直角になるように敷き並べる。これを上から押し固めて1枚の紙にする。こうしてできたパピルス紙は、今ではもうすっかりもろくなって、ほろほろになりやすくなっているが、その昔、できたばかりの頃には上質の紙に匹敵するほどの丈夫さであった。

続いて、パピルスに代わり皮紙が用いられる時代となる。

Die Vorteile von Pergament gegenüber Papyrus erscheinen uns heute selbstverständlich. Es war ein viel festeres Material als der zerbrechliche Papyrus. Darüber hinaus konnten Pergamentblätter ohne Schwierigkeiten auf beiden Seiten beschrieben werden, während die vertikale Richtung der Fasern auf der Rückseite eines Papyrusblattes diese als Schreibfläche weniger geeignet erscheinen ließ als die Vorderseite. Andererseits hatte auch Pergament seine Mängel. Zum Beispiel wurden die Ecken von Pergamentblätter leicht zerknittert und uneben. Darüber hinaus strength das glänzende Pergament – nach der Beobachtung des berühmten griechischen Arztes Galenus (2. JhdtmChr) – die Augen mehr an als Papyrus, der mit seiner rauheren Oberfläche das Licht nicht so stark reflektiert.

書物を作る上で皮紙にはパピルスにまさる利点があることは、今日、明らかである。皮紙はもろいパピルスよりもずっと丈夫で長持ちがする。さらに、皮紙には文字を難なく両面に書きつけられる。パピルス紙の場合、裏面は繊維が縦に走っているので、文を書くのに具合が悪いのである。しかし他方、皮紙にも欠点があった。例えば、皮紙のへりは縮んだりそったりしやすい。その上、2世紀の有名なギリシア人医師ガレノスの観察したところでは、皮紙は光沢があるので目を痛める。この点、パピルス紙はあまり光を反射しない。

書体に関しても変遷がある。

In der Antike waren zwei Arten griechischer Handschrift im allgemeinen Gebrauch. Die kursive Schrift, die man schnell schreiben konnte, wurde gewöhnlich für nichtliterarische alltägliche Schriftstücke angewendet, also für Briefe, Rech-

nungen, Rezepte, Gesuche, Berichte usw. Zusammenziehungen und Abkürzungen für häufig gebrauchte Wörter (etwa den bestimmten Artikel und manche Präpositionen) waren allgemein üblich. Demgegenüber wurden literarische Werke in einer gewählteren Handschrift geschrieben, den sogenannten Unzialen. Für diese ›Buchschrift‹ sind überlegtere und sorgfältig ausgeführte, voneinander abgesetzte Buchstaben charakteristisch, die etwa unseren Großbuchstaben ähneln. Einige der schönsten Exemplare griechischer Schreibkunst sind bestimmte klassische und biblische Handschriften aus dem 3.-6. Jahrhundert. Im Laufe der Zeit jedoch begann die Buchschrift zu verfallen, und die Unzialen wurden dick und klobig. Später, etwa am Anfang des 9. Jahrhunderts, begann man eine Reform der Handschrift und erfand für die Herstellung von Büchern eine kleinere fortlaufende Buchstabenschrift, die sogenannten Minuskeln.

古代においては、一般に2通りの筆記体が用いられた。草書体 (cursive,あるいは走り書きの書体)は速く書けるので、手紙・計算書・領収書・請求書・証書など文学的でない日常の記録に用いられた。この場合、しばしば出てくる語(冠詞や前置詞など)の縮約形や省略形が多い。他方、文学作品は、大文字書体(uncial)と言われる、形の整った書体で書かれた。この書体の特徴は、文字を丹念に注意深く書くことである。1字ごとに分かれていて、今日の大文字に似ている。この書体でのギリシア語の最も美しい作品例は、3世紀から6世紀にできた古典文学や聖書の写本である。しかし、時代が下るにつれ、この書体は次第にくずれ、大文字は太く不体裁になってきた。そこで9世紀の初期に書体の改革が始まり、小文字書体(minuscle)と言われる、走り書きの小文字が書物の筆写用に作り出された。

さて、正典が整えられていく歴史のプロセスを辿り、このプロセスを跡付け

ることは正典の本質を理解する上で必要不可欠な作業である<sup>112</sup>。個々の伝承やテキストを編集・保持してきた背景には、信仰共同体（例：初代教会）が自らの本来あるべき姿を知るのに正典たる規範を必須としたという経緯がある。正典史を子細に検討・吟味することを通して正典の諸問題に関する手掛かりを得ることも可能となる。20世紀を代表するドイツの教父学者カムペンハオゼン Hans von Campenhausen (1968:384) も述べているように「正典のできあがった状況は動機を歴史的に描出することはそれ自体、神学的に重要である<sup>113</sup>」。このように、正典が史的に確定されていくプロセスを明らかにすると同時に（新約本文の実体そのものが未だ固定されておらず）新約本文学（聖書の複雑な写本情報を比較検討しきょうこう校合作業を行う学問分野）が取り組むべき課題は少なくない<sup>114</sup>。

『聖書』のテキストは必ずしも絶対的に安定してはいないという事実<sup>115</sup>も実に大きな問題ではある<sup>116</sup>。ここで言う「安定していない」というのは唯一の不変のテキストしか伝わっていないということではなく、さまざまなヴァリエーションが存在し、基本的には同一のテキストながら細部においていろいろな解釈・表記が伝わっているという意味である<sup>117</sup>。ギリシア語で書かれた写本は実に5000以上、存在する<sup>118</sup>。テキストを確定する研究分野は「正文批判」（Textkritik, 本文批評ともいう）と呼ばれ、緻密なテキストの校訂作業を行う。個々の写本のテキストは読み解く上ではさまざまな問題が生じ得るのである。当時の古い写本（ギリシア語）には基本的に語と語の間にスペースがなく、文字が等間隔に句読点なしで並べて書かれている（文字はすべて大文字で記されている<sup>119</sup>。聖なる書物である『聖書』には大文字がふさわしいと考えられていた）。わかりやすくするためよく英語を使って用いられる説明として次のような事例がある<sup>120</sup>。

GODISNOWHERE.

この文例は区切り方によって複数の読みが可能になる。God is now here. 「神は今ここにいる」という意味にとる場合もあれば、(無神論者なら) God is nowhere. 「神はどこにもいない」とテキストを解釈することもあり得る。これに類する問題が古い写本の取り扱いに際してはしばしば起こる。

いずれにしても、正典性の基準、すなわち正典選択の原理に関して、使徒性 (apostolicity) が重要な役割を演じることは間違いない<sup>121</sup>。使徒性とは、該当文書がイエスの十二使徒の作であるか、あるいは、使徒の弟子の作であるかどうかを問うという意味である<sup>122</sup>。例えばマタイやヨハネは十二使徒であるが<sup>123</sup>、マルコやルカはそれぞれペテロやパウロの弟子である<sup>124</sup>。パウロは本来的には十二使徒でも使徒の弟子でもないが、次第に使徒の地位を獲得し<sup>125</sup>、かなり早い時期に使徒として行動し、また認められてもいた<sup>126</sup>。

「ヨハネ」(5:39-40)<sup>127</sup>

Ihr sucht in der Schrift, denn ihr meint, ihr habt das ewige Leben darin; und sie ist's, die von mir zeugt; aber ihr wollt nicht zu mir kommen, daß ihr das Leben hütet.

von et.<sup>3</sup> zeugen 「証する、証拠立てる」, daß = so daß 「～するために (目的)」

あなたたちは『聖書』の中に永遠の命があると考えて、『聖書』を研究している。ところが、『聖書』はわたしについて証をするものだ。それなのに、あなたたちは、命を得るためにわたしのところへ来ようとしない。

このように、使徒性は、書かれた文書の権威を増し、また教会そのものの権威を裏付けるという役割を果たす<sup>128</sup>。

後に4世紀になってキリスト教がローマ帝国の国教となった時点でも<sup>129</sup>、使徒の権威はなお制度的な教会によって概念化され用いられ続けるのである<sup>130</sup>。ここで改めて注目すべきこととして挙げられるのは、『新約聖書』が成

立するに当たっては、「使徒性」と文書（口承ではなく文書化しいつでも読める状態にすること）が果たす役割との間には緊密な関係があるという事実である。使徒性とはいわば一種の権威であり、書き言葉による文書が出回ることになれば、使徒性は大きなダメージを被ることになる。マルコ福音書（一番古い福音書。生前のイエスの言行についての記録）が成立するとすれば、十二使徒を中心とする弟子たちはその権威が失われることにもつながりかねない。書かれた福音書が広く普及し、この文書によってイエスの言行について詳しく知ることができるということになると、これまでイエスの言行を直接知っていることにより権威付けられていた使徒たちにもはや依存しなくてもよくなってしまふ。使徒たちの権威が絶対であるような時期には、マルコ福音書のような文書が作成されることはまずはあり得なかった<sup>131</sup>。

マルコ福音書の成立時期に関し、ここで言及する必要がある。すなわち、イエスの生前の情報を最初から目撃し行動を共にした弟子たち（十二使徒）が自らの権威を逸してでも、後世に文書の記録の形でイエスの言行を伝えようと決断のタイミングの問題である。イエス自身は書いたものを何も残さなかったとは言え<sup>132</sup>、当時の口伝の伝承を文書化して残そうとする動きは出ていたに違いない<sup>133</sup>。イエスの十字架の出来事は紀元後30年前後のことと考えられ、そうすると最初の福音書（マルコ福音書）が誕生するまでに少なくとも20-30年間に過ぎていることになる。イエスの直接の目撃者である十二使徒が伝える情報にしか権威が認められなかった時期を経て、まさにその弟子たちが自らの権威を失ってでも文書による記録を残そうと考えるに至った時機が紀元後1世紀半ばということになる。ただし、十二使徒の思いがマルコ福音書の主旨と真っ向から対立しているわけでは必ずしもない。イエスの生前の言行に関する情報が大切である点において、十二使徒とマルコ福音書の著者は立場が同一である。この意味でマルコ福音書は十二使徒の考えを継承していると言える。<sup>134</sup>

ここまで、マルコ福音書が成立したことの意義を検討してきた。この福音書

が文書化され次第に権威あるものとして認められ、キリスト教世界に普及していくプロセスを通して、ここにキリスト教文化圏内に存した異なる2つの立場を見ることができる。いわゆるヘブライズムとヘレニズムの2大潮流である。新約聖書の「使徒言行録」(6:1)、「ギリシア語を話すユダヤ人(ヘレニスト)」と「ヘブライ語を話すユダヤ人(ヘブライスト)」が登場する。これらユダヤ人キリスト者たちの2つのグループは最初是一个の教会に属していた<sup>135</sup>。初期のキリスト教徒は基本的にすべてユダヤ人であったが、前者に属するのは、エルサレム(およびパレスチナ)出身のユダヤ人で、セム語系の言語であるアラム語を母語とする集団である。イエスや十二使徒(彼の直接の弟子たち)がこのグループである。この集団とは違う後者のグループ(ヘレニスト:ギリシア語を話す人)とは、パレスチナ以外のさまざまな地域に移り住んだユダヤ人のことである。彼らは当時の国際語であったギリシア語を使っていた。こうしたユダヤ教のヘレニストの中から、キリスト教の伝道活動に触れキリスト教徒になる者が出てきた<sup>136</sup>(キリスト教のヘレニスト<sup>137</sup>)。

十二使徒を中心とするパレスチナ出身のユダヤ人たちは、ユダヤ戦争に続く70年代の混乱の中で権威が失墜してしまうことになる。それまでキリスト教世界で正統的な権威を体現していた組織が消滅するのである。このアラム語圏のユダヤ人グループに代わって指導的な立場に立つことになったのがヘレニストたちである。この際、マルコ福音書が果たす役割は決定的である。マルコ福音書以外の福音書も執筆され、共に権威あるものとして認められるようになり、これらが『新約聖書』を構成する文書となり、『新約聖書』の権威が「正典」として制度的に確立することとなる<sup>138</sup>。

『聖書』に収められている諸文書は古代のものであり、おのおのの文書をめぐる状況は必ずしも自明とは言えない。また古代の時代状況について理解を得ることはかなりの努力を要する作業である。歴史的背景に関する知識を獲得するには、キリスト教が成立した当時の経緯を記した専門書によるしかない。こうした言わば外側の問題もさることながら、根本的な問題点は『聖書』の各文

書そのものの難解さ・複雑さである。それぞれの文書はお互いにかなり異なった状況において成立しており、文書間の関連付けも決して容易ではない。この点、いわゆる古典と同じようにはいかないであろう。個別の作者が一つの論理の展開を示すような他の古典作品と違い、『聖書』の場合、諸文書ごとの著者が個別の思いを述べ、それらの文書群が集められ全体をなしているのが『聖書』であるのだからである。複雑さは必然的に避けられない<sup>139</sup>。

さて、どの文書を『聖書』に含めるのか、あるいは、除外するのかをめぐる問題は相当大きなものである。新約「外典」とは、新約「正典」が紀元後2世紀以降、編集されていくプロセスにおいて、その中から除外され採用されなかった文書群のことである<sup>140</sup>。『新約聖書』の場合、「正典」と「偽典」の区別は、正典を編集した、当時、成立しつつあった正統教会側の判断によっている。その基準は、時代的に古く、内容的に見て「使徒的」であることであった。

実際、外典の多くは大部分の「正典」の後（2世紀中盤以降）に著わされており、形式もほとんどが「正典」に依っている。内容に関しても、中にはキリスト教史上最大の異端と言われるグノーシス<sup>141</sup>的な要素も認められる。

ただし、そもそも「正典」とは、ある一時代に政治的・宗教的な意味で優勢な集団の立場を代表するものとも考えられる。「正典」には入れられなかった「外典<sup>142</sup>」が成立した初期キリスト教の事情を知ることは「正典」の位置付けを相対的に改めて見直す契機にもなるはずである。もちろん、教会が長い経過を経て「正典」を編集してきたことの神学的意義は正当であり揺るがない<sup>143</sup>。しかしながら、今日の教会が「正典」としている文書以外に、数多くのテキストがキリスト教団の歴史の中で成立し、また伝えられているという事実は、「正典」を狭い形式的な教義としてのみ捉えるのが不十分であることを示すことになろう。また、外典が主として依拠したのは、2世紀後半にもなお口伝伝承として流布していたイエスのことばに関する史料なのである。少なくとも、伝承様式として「外典」も高く評価されていてであろう。さらに、『旧約聖書』の外典（・偽典）が『新約聖書』の成立の背景を知るのに重要な史料

となるのである<sup>144</sup>。

このように『聖書』の関係文書の社会的背景を理解するためにも「外典」という史料は不可欠であるが、ただ、数も多く（原語も多岐にわたり）内容面でも多方面に及んでいる。『新約聖書』の正典の選択は、古代教会の規定の確立と連動する形で確定していった。一般的に正典の基準として以下の4つが挙げられる。

1. 使徒に由来するものであること
2. ある地方にとどまらず、広く教会全体で受け入れられていること
3. 典礼において用いられてきたものであること
4. 内容が正統信仰と整合性を保っていること

伝統的に「外典」は、ギリシア語で（「隠されたもの」を意味する）アポクリファ apocrypha と呼ばれていることからわかる通り、『新約聖書』の「正典」が編集されていく過程において、そこから除外された諸文書のことを指す<sup>145</sup>。『新約聖書』の「正典」の成立に大きく貢献したアタナシオス（アレクサンドリア<sup>146</sup>）は「正典」のことを「靈感による書」・「まことの書」と呼び、いわゆる「外典」を「異端の虚構」・「汚れなき者を欺くもの」と扱っている<sup>147</sup>。歴史的には教会内でのさまざまな議論を経て、367年にアタナシオス（295 - 372）の書簡において、初めて27文書が選択されることになり、この基準は397年のカルタゴ会議において正式に承認されることになった<sup>148</sup>。ただ「正典」の範囲が確定していない時期にあっては線引きが流動的であり、初期キリスト教の文書の中には一時的に「正典」と同等の取り扱いを受けていたものもあるようである（「パウロ行伝」・「ペトロの黙示録」・「バルナバの手紙」など）。一方で、比較的早い時期から「異端の書」として排斥されていたものもある<sup>149</sup>。後者の中には、確かに「正典」と同一の価値が認められるように見受けられる文書もあるが、基本的に「正典」を補足する傾向を有すると言っていいであろう。

すなわち「正典」の中に動機はあるけれどもその当該記事が欠けていて<sup>150</sup>、これを補おうとする趣旨の文書のことである。例えば「トマスによるイエスの幼時物語<sup>151</sup>」はイエスの幼年時代を想像力によって補足しようとしている。ヨルダン川でヨハネから洗礼を受けて始まるイエスの公生活に先立つ時期のイエスについて知りたくなるのは誰しも同じであろう<sup>152</sup>。1例を「トマスによるイエスの幼時物語」（第4章1-2節）から引けば次のようである<sup>153</sup>。

（イエスが）村を歩いて歩いていると、子供が駆けて来て（イエスの）肩に突き当たった。するとイエスは怒って言った：「お前はもう道を歩けない」。すると子供は忽ち倒れて死んでしまった。ある人たちがこの出来事を見て言った：「この子は一体どういう生まれなのだろう。言うことがみな成就してしまう」。それで死んだ子の両親はヨセフのところへ来て咎めて言った：「あなたにこんな子がいるからには、私たちと村で一緒に暮らすわけにはいかない。（それが嫌なら）あの子に祝福して呪わないように教えてほしい。私たちの子供を殺すのだから」。

この引用部分の下線の箇所は、「ローマ書」（12:14）の「あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福すべきであって呪ってはいけません」を思い起こさせるのではないだろうか。



トマスによる福音書

ここに見るように、多くの場合、「外典」は「正典」の文学形式に依り、これを拡充しようとする傾向が見られる。ただし、年代史的には「正典」よりも遅め（2世紀中葉以降）に著わされたせいも、「外典」はヘレニズム文学に特徴的な、神的英雄を主題とする伝記小説風の形式をとる場合が多い。確かに通俗的ではあるが、当時のキリスト者大衆の近いものであったであろう。このように、「外典」には、当時のヘレニズム世界に生きていた一般の人々の宗教的要求を満たす役割もあったのであろうと思われる<sup>154</sup>。「トマスによるイエスの幼時物語」（5歳から12歳までのイエスを描く）にしても、その背景には、イエスの誕生や幼時に関する伝説の源流<sup>155</sup>が「ルカによる福音書」が書かれた時代以前まで遡れるという事実があるのである。神童としてのイエスの奇蹟物語として、公生涯でイエスが行ったとされるさまざまな奇跡を暗示しており<sup>156</sup>、2世紀終わり頃の大衆レベルでのイエス像の一端が垣間見える史料として価値があると言える。

#### 4. 『聖書』の伝播・普及

オランダの人文学者エラスムス（Desiderius Erasmus、ロッテルダム、1469-1536年）がギリシア語の『新約聖書』を世に出したのは1516年のことである。1514年8月に彼がバーゼルを訪ねた時、当時、著名な出版家ヨーハン・フローベンと既に打ち合わせをしていたと言われる<sup>157</sup>。けだし、この時期に至ってようやく『新約聖書』のギリシア語本文が印刷されたのである。一方、ヒエロニムスのラテン語『ヴルガタ聖書』は名声を博していた<sup>158</sup>。しかしながら、ギリシア語『新約聖書』が出版されれば、ギリシア語・ラテン語をとともにできる学者から、教会が公認するラテン語の『聖書』を批判・修正するきっかけを与えることにはなる。

1515年7月、エラスムスはバーセルで、しっかりしたギリシア語写本を手に入れようと努めた。彼はその写本を原稿としてそのまま印刷者に回し、これに自らのラテン語訳を付けようと考えたのである。ところが、その時、手に入った写本はと言えば、1443年にラグサのヨーハン・ストイコヴィチがバーゼルのドミニコ修道院に遺贈した写本コレクションからのもので<sup>159</sup>、印刷所へ送る原稿としては、かなり修正を要するものであった。さらに、例えば「黙示録」の写本<sup>160</sup>などは、最後の部分に欠損があり、エラスムス自身がラテン語の『ヴルガタ聖書』を用いて、その本文をギリシア語に訳して間に合わせたくらいであった。後に彼自身が語っているように「編集というより大急ぎでこしらえたもの」(praecipitatum verius quam editum)である<sup>161</sup>。エラスムスの版はギリシア語の『新約聖書』として最初の印刷本で<sup>162</sup>、その第2版（1519年）は、ルターのドイツ語訳の底本となった<sup>163</sup>。

ルターは、プロテスタントの立場から『聖書』を総合的に理解しようとする立場に貫かれており、ドイツ語という民衆の言語が教会の礼拝・典礼の言語として用いられ始めたということで影響力が大きい<sup>164</sup>。信徒と司祭という対立がもはや存在しないのなら、司祭や聖職者用の特別なことばというものもはや

必要がない。宗教改革の時代の言語神学 (Sprachtheologie) にとって、ルターのドイツ語聖書は極めて大きな影響を与えたできごとであった<sup>165</sup>。なお、この時、ルターが『旧約聖書』翻訳の元にしたのは、ヘブライ語で書かれた「マソラ本文」(Masoretic Text<sup>166</sup>) であった<sup>167</sup>。長らく、ヘブライ語と並んで、ギリシア語・ラテン語だけが学問の世界で認められていた言語であった<sup>168</sup>。「ヨハネによる福音書」(19:19-20) にも次のような記述がある。この記述が、これら3言語を聖なる言語とみなす契機となったのである。

「ヨハネ」(19:19-20)<sup>169</sup>

Pilatus hatte auch eine Aufschrift schreiben und auf das Kreuz setzen lassen; darauf stand geschrieben: „Jesus, der Nazoräer, der König der Juden.“ Diese Aufschrift lasen viele von den Juden, weil der Platz, an dem Jesus gekreuzigt wurde, nahe bei der Stadt lag; es war geschrieben auf hebräisch, lateinisch und griechisch.

ピラトは罪状書きも書いて、十字架の上に掲げた。それには「ユダヤ人の王ナザレ人イエス」と書いてあった。それで、大勢のユダヤ人がこの罪状書きを読んだ。イエスが十字架に付けられた場所は都に近かったからである。またそれはヘブライ語・ラテン語・ギリシア語で書いてあった。

さて、現代に生きる私たちが、テキストが伝承されることが稀であった中世という時代の、写本を制作する仕事とはどんなだったかを想像するのはいかにも難しいことである<sup>170</sup>。まず書記者(写生字)はページに罫線を入れ、一文一文字を手で書き入れ、一冊ずつ綴じていく<sup>171</sup>。15世紀以前、あらゆる写本は一冊ずつ筆写する必要があったのである<sup>172</sup>。元となる貴重な写本をインク・羽ペンを使って丁寧に書き写さなくてはならなかった<sup>173</sup>。それでも書写の仕事は「書記とは手による説教」(カルトゥジオ会規則)と言われるくらい評価される作業であった。と言うのも、書かれた言葉が話された言葉と同じ

くらいキリストの教えを伝え広めるからである。しかも、目の前の人たちにだけ語りかける口頭の説教と違って、写字生は（死後も本の中で）未来の人間に説教するわけである<sup>174</sup>。書写をすると、聖書のテキスト・教父による注解・教会暦の流れが自ずと頭に刻まれていくという意味でも知的な活動なのである<sup>175</sup>。

手書きで複製するケースではほとんどの場合、どうしても多かれ少なかれオリジナルの版下とずれが出てしまう<sup>176</sup>。また、テキストを書き写す・挿絵を入れる・装飾頭文字を描く・見出しを付けて分類する・綴じて製本するという工程を経ての作業では<sup>177</sup>、読み物への需要が高まりつつあったこの時代において必要な部数を用意するのが間に合わなかった<sup>178</sup>。そして何よりも、ある1つのテキストと完全に同じものを複製することができる印刷術という技術開発は14世紀に始まっていたのである<sup>179</sup>。



さて、印刷された本にはタイトルページを付けることになる。というのも、活版印刷が書物を市場のために大量生産し、その生産量が市場における販売数に

よって決まってくるのであるから、とりわけタイトルページなどによって読者の購買意欲をそそる必要があったからである<sup>180</sup>。この印刷術という新しいメディアを使えば<sup>181</sup>、現実のできごとに素早く対応することができるということに同時代人も早くから気がついていて、当時、印刷術に対する評価はさまざまであり、支持者と反対者の両方がいて、それぞれに言い分があった。ただ、現実問題としては、新しく時代をリードするこのメディアに適うような新しいテキスト種、例えばビラやパンフレットそして新聞の先駆けのようなテキストが現われ、これのメディアが大衆に素早く情報を行き渡らせる役目を果たし、印刷術が広まる素地ができた<sup>182</sup>。グリムも言語学の立場から、印刷術の果たした役割について述べている<sup>183</sup>。

Wissenschaftliche wortforschung überhaupt konnte weder bei Griechen und Römern, geschweige in unserm mittelalter, sondern dann erst gedeihen, als seit erfindung der druckerei die wortvorräte nicht nur der beiden classischen, sondern allmählich auch der vulgarsprachen in unerlässlicher fülle der untersuchung zu gebot standen. (Grimm<sup>2</sup>1879:307)

学問としての語彙研究が活発に行われるようになったのは、ギリシア人・ローマ人の時代でもなく、もちろんドイツの中世文学においてでもない。印刷術の発明以来、2つの古典語だけではなく、いわゆる平俗語に現われる多量の語彙が研究のために自由に使えるようになってからのことである。

確かに、活版印刷がなかったとすれば、宗教改革も実際に行なわれたような形ではありえなかったであろう。もっとも、宗教改革の前の時代から少なからず『聖書』の翻訳が出されてはいたことは事実である。ただし、中世においては『聖書』を翻訳するというのは特別なことであった。『聖書』を民衆の言葉

に訳すことは完全に禁止されていたというわけではなかったけれども、異端視されることへの不安が大きく、司教たちはかなり慎重な態度をとっていた。実際、『聖書』が正式の順序で全訳され出版されたというケースはごく僅かであった。これに対して、『聖書』の注釈、あるいは、知識文学（Wissensliteratur, 聖書を中世風に理解しておのおののコンセプトに従って仕上げた書物のこと）という性格をもつテキストは大量に出回って<sup>184</sup>。このように、中世の『聖書』関連の文献は民衆にはそれほど近くない形態で編纂されており、およそ俗ラテン語（Vulgata）『聖書』を理解するために役立つ解説書といったところである。

さて、1454年に、ラテン語で書かれた「42行聖書<sup>185</sup>」をゲーテンベルクがマインツ（ドイツ）で刷り上げたのが<sup>186</sup>、写本から印刷体へのメディアの交替を決定づける重要な契機となった。ただ、活字・装飾文字を用いたグラフィックデザインは明らかに写本を模範としている。印刷本はあくまで手で書かれたように見えるのがよいとされていた<sup>187</sup>。



ゲーテンベルクの「42行聖書」

時代と共に本の機能も変化してくる。ある程度の購買力をもった社会層をターゲットにして市場に出され、大衆のニーズが発行部数や内容を決定するよ

うになる<sup>188</sup>。併せて、宗教改革者（とりわけルター）、そしてこれを受けて立つカトリックの側も、印刷という新しいメディアのもつ扇動的な宣伝効果に気づき、論争・誹謗中傷の場として大いにこのメディアを活用した。宗教改革がまたたく間に広がり、成果を上げたのは、情報を広範囲に行き渡らせる印刷というメディア（この場合、ビラ・パンフレットの類<sup>189</sup>）のおかげと断言している<sup>190</sup>。

現代の視点からすると、印刷技術の発明以降もなお写本が生き永らえていたことは驚きに値するかもしれない。古き物語がまず写本に書き下ろされ、その後、印刷術というメディアが出現する<sup>191</sup>。今日の私たちは、写本と印刷本を分けて捉え、全く別々のカテゴリーに属するものとみなしがちであるが、当時の現実を決してそうではなかった。すなわち、書物の所有者としては、自分の望むテキストさえ手に入れば、それが写本であろうと印刷本であろうと気にとめてはいない<sup>192</sup>。実際、15世紀の書籍では、写本と印刷テキストが入り混じったものが少なくない。写本と印刷本の間には私たちが思うような価値の序列がはっきりあったわけではないのである<sup>193</sup>。写本の製造が15世紀に入っても相当な規模で行なわれており、例えば写本取引の中心地であった低地諸国では15世紀を通じて写本の生産量はうなぎのぼりに上昇し1490年から1500年にかけてピークに達している。時は印刷術の時代に入っているにもかかわらずである。このように、手書きの写本は依然として魅力を放ち続けていた。しかしながら、ヨーロッパの人々は新たに登場した印刷術の技術的驚異にも同様の関心を示すことになっていく<sup>194</sup>。

さて、近代各国語による『聖書』の完訳が本格化するには<sup>195</sup>、宗教改革ならびに印刷術を待たねばならなかった<sup>196</sup>。例えばドイツでは最初のドイツ語完訳聖書「メンテル聖書」が1466年に出版され<sup>197</sup>、また、イギリスにおいても14世紀末ウィクリフ<sup>198</sup>の提唱のもと完成にこぎつけた全訳「ウィクリフ派英訳聖書」（新約1380年、全訳1382年）が見られるが<sup>199</sup>、その完成後、直ちに教会当局の厳しい弾圧を受ける運命にあった。時機を得て、ヘブライ語の『旧約聖書』・ギリシア語の『新約聖書』の原典から訳出することによ

て<sup>200</sup>、近代における本格的な『聖書』翻訳への道を拓いたのがルターであるが、ただし、ルター訳には、ドイツ語の性格に合わせるために逐語訳とは異なる意訳（あるいは個性的な自由訳）がしばしば見られる<sup>201</sup>。主にこの点に対する問題意識から種々の新訳が試みられた。例えば「ヘルボルン聖書」（Herborner Bibel, 1602-1604年）・「エルバーフェルト聖書」（Elberfelder Bibel, 1855-1871年）等である<sup>202</sup>。もっとも、ルターは存命の間、全面的な改定を重ね、一般には彼の死の前年に出版された1545年版が今日の「ルター聖書」の標準版として普及している。1892年には教会によるルター訳の標準改訂版が出され、以降、1913年に再改訂版（さらに、「新約」は1938年・1956年に、「旧約」は1967年に新改訂版）が出版されている。

現代まで、ルター訳に次いで流布してきたのが、「チューリヒ聖書」（Zürcher Bibel）の改訂版（1954年）である。チューリッヒを中心に活動していたスイスのツヴィングリ（Zwingli<sup>203</sup>）に始まる改革派の聖書である<sup>204</sup>。「ルター聖書」にしても「チューリヒ聖書」にしても、今日の語法に合うように、正書法・文体面などが改訂されている。また、学術的正確さを意図した私訳として<sup>205</sup>、メンゲの翻訳（1926年）が挙げられる。これは、古典文献学者メンゲ（Herman Menge）の訳出で、ヘブライ語の『旧約聖書』・ギリシア語の『新約聖書』の原典に忠実な翻訳である。原典の意味が不明な場合には脚注に複数の訳出の可能性を示唆している<sup>206</sup>。



このように、ドイツ語圏では、プロテスタント側の「ルター訳」の現代改訂版（1984年）、もしくは、スイス改革派の「チューリヒ聖書」（1954年）の他、カトリック系の「グリューネワルト聖書」（1924-1926年）や「ヘルダー聖書」（1965年）などが注目を引く。

ドイツ語圏以外に目を向けると、イギリスでは、16世紀の間に約10種に及ぶ英訳聖書が相次いで出版された<sup>207</sup>。主なものは、プロテスタント系の「カバデル訳聖書」（1535年）・「大聖書」（1539年）・「ジュネーブ聖書」（1560年）・「主教聖書」（1568年）である。この時期のカトリック系の聖書訳としては唯一「リームズ・ドゥエー聖書」（1610年）が挙げられる。従来、中世における聖書翻訳がいずれもラテン語訳聖書からの重訳であり（また、写本の形で限られた範囲内の流布にとどまったのに対して）原典であるヘブライ語『旧約聖書』・ギリシア語『新約聖書』からの直接の翻訳を試み、印刷本として広く流布される近代語による『聖書』の翻訳は<sup>208</sup>、イギリスをはじめ<sup>209</sup>、オランダ<sup>210</sup>・デンマーク・スウェーデン・フィンランドなどで気運が高まった<sup>211</sup>。

英訳聖書の頂点に立つのは1611年に刊行された「欽定訳聖書」（米：King James Version, 英：Authorized Version）である<sup>212</sup>。これはジェームズ1世の命を受けて、当代を代表する50数名の聖職者・学者が周到な計画のもと、「ティンダル Tyndale 訳新約聖書」（1526年）以降のあらゆる英訳聖書を踏まえて訳出したものである<sup>213</sup>。ただし、英語そのものの変化、また聖書本文批評の進歩により、19世紀末「欽定訳」の改訳が公刊されて後は、新訳・改訂訳が相次いで試みられ、20世紀の間に50種類に及ぶ英訳聖書が英米で刊行されている。一方、「欽定訳」の伝統を敢えて絶ち現代イギリス英語で訳出した格調ある「新英語聖書」（新約1961年、完訳1970年）、および、アメリカ聖書協会版のアメリカ口語訳「現代英訳聖書」（新約1966年、完訳1976年）も注目に値する。この「現代英訳聖書」に範をとって出版されたのが、ドイツ語版（新約1967年、完訳1982年）・フランス語版（新約1971年）・オランダ語版（新約1972年）である。

イギリスでの聖書史の中で1人だけ取り上げるとすれば、ジョン・ミル（John Mill）であろうか。彼の業績は次のようである。

John Mill (1645-1707) , ein Fellow am Queen's College in Oxford, began mit seinen Arbeiten an der Textkritik des Neuen Testaments, die dreißig Jahre später in der epochemachenden Ausgabe des griechischen Textes ihre Erfüllung fanden – sie erschien auf den Tag genau zwei Wochen vor seinem Tode im Alter von 62 Jahren (am 23. 6. 1707) . Abgesehen davon, daß er alle Belege aus griechischen Handschriften, frühen Übersetzungen und Kirchenvätern sammelte, deren er habhaft werden konnte, stellte Mill seiner Ausgabe wertvolle Prolegomena voran. In ihnen behandelte er den Kanon des Neuen Testaments und die Überlieferung des neutestamentlichen Textes, beschrieb 32 gedruckte Ausgaben des griechischen Neuen Testaments und fast 100 Handschriften, ferner untersuchte er patristische Zitate aus fast allen Vätern von einigem Werte. (Metzger 1966;108)

オックスフォードのクイーンズ・カレッジの教官であったジョン・ミル（John Mill, 1645-1707）は、新約聖書の本文批評の研究を始め、30年後にその成果を出版した。この画期的なギリシア語本文は彼が63歳で死ぬ2週間前に出版された。この版においてミルは、手に入る限りで、ギリシア語写本・初期の翻訳・教父から得られるすべての証言を収集し、これにりっぱな序論を付した。序論において、彼は新約聖書の正典と本文の伝達を取り扱い、印刷出版された32のギリシア語聖書と100近くの写本を論じ、少しでも重要と思われるような教父の引用をすべて取り上げた。

近代初期に新・旧両派の対立が特に激しかったフランスでは、『聖書』の翻訳が当局の強い圧迫を受けたために、ドイツにおける「ルター訳」や、イギリスにおける「欽定訳」のような古典的標準訳は育たなかった<sup>214</sup>。しかしながら、

現代フランス語訳として「スゴン訳聖書」(1880年)などの他、正確で名訳と評される「エルサレム聖書」が出色であり、これを範として、英語版とドイツ語版が刊行されたほどである(1966年)。フランス語訳では、新・旧両派の協力になる「共同訳」(新約1972年)も注目される。

この章の最後に、以下の各言語ごとに「ヨハネによる福音書」(3:16)の箇所がどのように表現されているかを示す<sup>215</sup>。

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。(ヨハネ 3:16)

#### 独語

Also hat Gott die Welt geliebet, dass er seinen eingebornen Sohn gab, auf dass alle, die an ihn glauben, nicht verloren werden, sondern das ewige Leben haben.

#### 英語

For God so loved the world, that he gave his only begotten Son, that whosoever in him should not perish, but have everlasting life.

#### 仏語

Car Dieu a tellement aimé le monde, qu'il a donné son Fils unique, afin que quiconque croit en lui ne périsse point, mais qu'il ait la vie éternelle.

#### 伊語

Poichè Iddio ha tanto amato il mondo, che ha dato il suo unigenito Figliuolo, affinché chiunque crede in lui non perisca, ma abbia vita eterna.

蘭語

Want alzo lief heeft God de wereld gehad, dat Hij zijnen eeniggeboren Zoon gegeven heeft, opdat een ieder, die in Hem gelooft, niet verloren ga, doch eeuwig leven hebbe.

デンマーク語

Thi saaledes elskede Gud Verden, at han gav sin Søn den enbaarne, for at hver den, som tror paa ham, ikke skal fortabes, men have et evigt Liv.

スウェーデン語

Ty så älskade Gud världen, att han utgav sin enfödde Son, på det att var och en som tror på honom skall icke förgås, utan hava evigt liv.

フィンランド語

Sillä niin Jumala on rakastanut maailmaa, että hän antoi ainokaisen Poikansa, jotta Kuka ikinä häneen, se ei hukkuisi, vaan saisi iankaikkisen elämän.



The Shrine of the book, which houses the Dead Sea Scrolls, at the Israel Museum in west Jerusalem.

## 註

- 1 もっとも、これら2つの祝祭が、キリスト教の教義上、共に重要な祭事であることは確かである。
- 2 物語のプロットは、主人公が精霊たちによって自身の過去・現在・未来の姿を見せられることによって、クリスマスの喜びに目覚め、改心していくというものである。
- 3 当初は、復活の主日とその前日の典礼で行われていた。
- 4 やがて、復活の主日の前の主日（受難の主日）から一週間全体が「聖週間」として大切にされるようになった。4世紀末のエルサレムで「聖週間」の典礼は特に盛大に行われていたが、次第に他の教会にも広まっていった。
- 5 小さな人たち、貧しい人たちに手を差し伸べるクリスチャンの側にイエスはいると通常は思われている。
- 6 日本の都市部でも、仕事がないために橋の下や公園などで野宿を強いられている人が大勢いる。仲間が集まって、せめて暖かい宿で夜を迎えることができるようにと活動している人も少なくない。屋外で日々を過ごさざるを得ない人には、役所の人も交渉し（弁当の引換券や銭湯への入場券を配るよう要望することから始めることになる）、少しずつ運動の成果が現われているようには感じられる。しかしながら、残念なことに、仕事をして自立したいという根本的な願いの実現は現実的にはなかなか難しい。
- 7 生きるために、神にすがりつくしかない人を、聖書の中では「貧しい人」という言葉を使って表現することがある。
- 8 隣人愛と並んで、『旧約聖書』の「申命記」の6章5節にある「心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くし、あなたの神、主を愛しなさい」という御言葉がある。
- 9 科学と神の関係についての一般的な認識は次のようなものであろう。すなわち、科学とは、神の力を借りずに宇宙や物質の始まり等を説明するはずのものであり、それらを解明する最後の部分で神を持ち出すのは説得的でない、といったものである。その背景には、人智の及ばない神の領域とされてきた事柄が次々と科学の理論によって説明が可能となり、神の存在に頼らなくても、この世界を創ることができるのではないかという科学者たちの思いがある。こうして、長い間、万物の創造主と考えられてきた神が否定されつつあるわけであるが、実は、高名な科学者の多くが神の存在を信じており、神や信仰について熱い思いを語っている。神を否定するかのような研究をしている人たちが何故、神を

- 信じることができるのであろうか。
- 10 クメール & デュメジル (2019:156-157) : 「ビザンツ帝国の東また北の領域における蛮族たちの襲撃の方が皇帝たちにとっては手を焼いた」。
  - 11 クメール & デュメジル (2019:110-114)。クメール & デュメジル (2019:115) : 「フランク族の世界では、当初は単なる王家の管財人だった宮 (きゅう) 宰 (さい) が、七世紀に中央行政の代表者になった。この変化はしばしば、蛮族に国家という観念がないことの象徴と考えられていた」。
  - 12 クメール & デュメジル (2019:125-130)。クメール & デュメジル (2019:130) : 「蛮族の新しい国家は7世紀からカトリックに改宗することによって、ビザンツ帝国を異端とみなすようになり、蛮族はローマ教皇を新しい交渉相手と考えるようになった」、および、クメール & デュメジル (2019:131-132) : 「蛮族たちは、カトリック司教団との関係をきわめて早期から維持した。これはなによりもまず、司教団がその公的機能によってローマの秩序崩壊後も存続した唯一の組織だったからである。他方、領土を保持するためには、結局のところ、概して君主と司教の協力関係が必要だったのである」を参照。
  - 13 フィリップス (1994:197)
  - 14 フィリップス (1994:196-199)
  - 15 クメール & デュメジル (2019:155-157)
  - 16 クメール & デュメジル (2019:10)
  - 17 クメール & デュメジル (2019:156)
  - 18 クメール & デュメジル (2019:115)
  - 19 フィリップス (1994:17)
  - 20 フィリップス (1994:19) : 「彼ら (=ユグノー) は16世紀中葉にはストラスブールの人口のほぼ1割を占めていた」。
  - 21 フィリップス (1994:316)
  - 22 フィリップス (1994:8) : 「アルザスの地はライン河とヴォージュ山脈に挟まれ、隣り合う2つの列強により、遙かな昔から共に熱狂的に渴望されてきた」。
  - 23 フィリップス (1994:315)
  - 24 フィリップス (1994:11-12)。この結果、大まかに言って、アグノーの森の北部ではフランク語 (フランク族の言語) が、また、その他のアルザス地方ではアレマン語 (アレマン族の言語) が話されることになった。
  - 25 森田 (2002:288) : 「ロマ・カトリック教会と共存しながら、ローマという古代

世界との連続性という象徴を武器に強化してゆく」。

- 26 ドイツ王ルートヴィヒ（カール大帝の子ルートヴィヒ1世の次子）とフランス王シャルル（カール大帝の子ルートヴィヒ1世の末子）の間で結ばれ（カール大帝の子ルートヴィヒ1世の長子ロタールに対し軍事的勝利をおさめた後に）、最終的にカロリング朝の帝国をゲルマン語圏とロマンス語圏とに分割することで合意をしている。森田（2002:289）：「西部のフランク族がローマ化して以来、ゲルマン語圏とフランス語圏の境界線がはっきりと線引きされており、言語圏で帝国の分割を実現したのである」。
- 27 カール大帝の子ルートヴィヒ1世（ルイ1世、敬虔王、778-840）の死後、帝国は3人の息子に分割された（ヴェルダン条約）。長男ロタールはロートリングゲン・ブルグンド・イタリアと皇帝位を、次男ルイは東フランクを、末子シャルルは西フランクを相続した。さらにロタールの血統の断絶により、ロートリングゲンも東西フランク王国によって分割された（メルセン条約）。中フランクは、具体的な地名で言えば、ネーデルラント地方・ヴェストファーレン・プファルツ地方・アルザス・ロレーヌ地方・ブルゴーニュ伯領・サヴォイア伯領・プロヴァンス地方・北イタリアという南北縦に長い地域であるが、このうちイタリア以外の諸地域は、東西のどちらの言語圏に属するのか、いわば不明確な地域であった。なお、メルセン条約により、アルザスおよびロレーヌ西部は西フランク領となった（880年のリブモン条約により、ロレーヌ西部は東フランク領に移譲される）。
- 28 森田（2002:285-287）
- 29 森田（2002:289-290）
- 30 羊皮紙写本（[https://fr.wikipedia.org/wiki/Serments\\_de\\_Strasbourg](https://fr.wikipedia.org/wiki/Serments_de_Strasbourg)）
- 31 古フランス語（ancien français）は9世紀から14世紀にかけて現在のフランス北部を中心に話されていたフランス語のことである。西ローマ帝国の崩壊（476年）以降、俗ラテン語の地域ごとの分化が進み、ガリア（今のフランス）の俗ラテン語はガロ＝ロマンス語と呼ばれる方言群となるのだが、フランス語もこのガロ＝ロマンス語の1つである。
- 32 フランク族の歴史家ニタール（Nithard）が残した『ルイ敬虔王の息子たちの歴史』（„Histoire des fils de Louis le Pieux“）によると、両王はラテン語でも自国の言語でもなく、お互いに相手国の言語を用いて兵の前で宣言し、両国の兵はそれぞれ自国の言語で誓いを行ったという。

- 33 本文は、古高ドイツ語・古フランス語で執筆されているが、前文は、これら 2 言語（古高ドイツ語・古フランス語）のほか、ラテン語でも書かれている。古フランス語のテキストとラテン語のテキストは異なっており、ゆえにこの文書が最古のフランス語の文献と言われている。なお、ルイ・シャルルの部下たちはラテン語をほとんど解せなかったと考えられる。
- 34 [https://de.wikipedia.org/wiki/Stra%C3%9Fburger\\_Eide](https://de.wikipedia.org/wiki/Stra%C3%9Fburger_Eide)
- 35 ロタール（795-855）は、兄弟のうち長兄であり、末弟（母が異なる）のシャルル（823-877）とは 30 歳近い年の差があった。直の弟のピピン（797-838、兄弟間の領土争いの最中に死去）・ルイ（806-876）とも争いを繰り返していたロタールは、領土の分配の件で、とりわけシャルルに対して嫉妬心が強かった。ルイはただ王国東部領土の拡大を目指していただけだったので、西側の領土を要求していたシャルルとは競合関係にはなかった。そこで、ルイとシャルルの二人は同盟を組み、兄ロタールに立ち向かうことになる。
- 36 <http://www.medieviste.org/?p=591>
- 37 ルイ（Louis）という名前はもともとゲルマン語の Ludovic（Lud-wig < Hlud「名高い」-Wig「戦士」）が簡略化したものである。
- 38 このテキストを現在のフランス語で言えばおよそ次の通りである：Pour l'amour de Dieu et pour le salut commun du peuple chrétien et le nôtre, à partir de ce jour, pour autant que Dieu m'en donne le savoir et le pouvoir, je soutiendrai mon frère Charles, ici présent, de mon aide matérielle et en toute chose, comme on doit justement soutenir son frère, à condition qu'il m'en fasse autant et je ne prendrai aucun arrangement avec Lothaire qui, à mon escient, soit au détriment de mon frère Charles.
- 39 フィリップス（1994:25-26）：ヴェストファーレン条約（1648 年）の頃の言語状況のことを「たとえ住民がドイツ民族であっても、国王のことは（＝フランス語）がアルザスのような地方の公用語でもあったということは、この時代の道理に叶っていた」。また、同書（26 頁）には「国王（＝ルイ 14 世）は言語的統一よりも宗教的統一の方をはるかに懸念していた。[...] フランス語化するよりはカトリック化することの方にはるかに熱心であった」とある。
- 40 フィリップス（1994:15-16）
- 41 大沢（2012:334）：「アングロサクソン年代記は、[...] ウェセックスの王アルフレッドが編纂を命じて、王自身もその編纂に参加したといわれるが、その後は王や太守等の権力の側の人々ではなく、各地の修道院や教会の聖職者によって書き

継がれて行った」。

- 42 大沢 (2012:71)。795 (もしくは 796) 年に関する記述である。
- 43 大沢 (2012:332) : 「歴史的事実としての信憑性について、すなわち、その記録の内容を史実として認めることができるかどうかということについては、綿密に検討されなければならない」。
- 44 ここに記載のオッフア王 (Offa, 757-796 年) はマーシャ (Mercia) 王国の国王で、マーシャとウェールズの間土塁を築いたことで知られる。オッフア王は大陸のカール大帝も一目おくほどの人物であったと言われている。マーシャ王国は早くからキリスト教使節による伝道を容認していたことがわかっている (原 2010:135)。イングランドの神学者アルクイン (Alcuin, 735-804 年) がカール大帝の顧問を務めたほど、イングランドと大陸との文化的交流が盛んであったと考えられる。
- 45 原 (2010:139) : 「調査を終えた現在では発掘作業が実施された場所も完全に埋め戻されている」。
- 46 大沢 (2012:10)
- 47 本来の意味のデンマーク人に限った意味ではない。
- 48 [https://www.google.co.jp/search?newwindow=1&rlz=1T4GIGM\\_jaJP530JP530&q=norman+conquest+of+england&tbm=isch&source=univ&hl=ja&sa=X&ved=2ahUKewjOyOGtuL3jAhXKE4gKHe6eDvsQiR56BAgJEBA&biw=1236&bih=494#imgrc=-jAb9flw\\_-3tGM:&spf=1563417633712](https://www.google.co.jp/search?newwindow=1&rlz=1T4GIGM_jaJP530JP530&q=norman+conquest+of+england&tbm=isch&source=univ&hl=ja&sa=X&ved=2ahUKewjOyOGtuL3jAhXKE4gKHe6eDvsQiR56BAgJEBA&biw=1236&bih=494#imgrc=-jAb9flw_-3tGM:&spf=1563417633712)
- 49 大沢 (2012:332) : 「ノルマン人のイギリス征服は、統治機構を根本的に破壊するというのではなく、アングロ・サクソン王朝の支配階級の人々を取り除いただけで、一般民衆の生活に致命的な影響をあたえるということもなかった」。
- 50 大沢 (2012:11)
- 51 アルフレッド大王とグズルムが交わした条項はデーンローの策定に関することが大半であった。
- 52 和田 (2016:133-136)
- 53 和田 (2016:128-129)
- 54 ルーン文字がどのようにして誕生したのか、その探究の歴史は長いものの、未だに学術的な意味では最終的な結論には至っていない。神秘のベールに包まれたままである。
- 55 ルーン文字はこのように神話的なモチーフとして重要視される。

- 56 巨大なトネリコのことで9つの世界を支えているとされている（9はゲルマン人の世界で神聖な数である）。
- 57 ルーン文字は神譲りでウォーダンに由来すると言われること自体、中世の呼びとがルーン文字がどこから来たのかもはや知らないということを示している（Vennemann 2011:48）。
- 58 「シグルドリーヴァの歌」という詩の中にもルーンが歌われている。
- 勝利を臨むならば、勝利のルーンを知らねばなりません。  
剣の柄の上か、血溝の上か、剣の峰に彫り、  
二度チュールの名を唱えなさい。  
信じる女に裏切られたくなければ、麦酒のルーンを知らねばなりません。  
角杯の上に、手の甲に彫りなさい。  
爪にニイドのルーンを記しなさい。
- 59 ヨーロッパの基底に想定されるケルト文化について言えば、古代ケルト人の場合、紀元前2000年にはすでに一大勢力を築いていたようである。ゲルマン人に先立ち現在のヨーロッパに展開し、ゲルマン人に大きな影響を与えたのも事実である。ただし、ギリシア・ローマとの相対的關係で、歴史に記述されるようになるのはようやく紀元前6～5世紀頃からである。
- 60 古ノルド語の表記はルーン文字が使われ、それゆえ2世紀～11世紀にかけて多くのルーン文字の石碑が残されている。
- 61 岡崎（1995:5）：「ルーン文字銘文の多くはキリスト教の導入後に違いない」。
- 62 紀元後2世紀頃にライン川・モーゼル川流域に住んでいたキリスト者はいずれもローマ人であった。ゲルマン人のキリスト教への改宗は、498年のクリスマスにフランク王国の創設者クローヴィスが受洗することに始まる。
- 63 ページ（1996）『ルーン文字』菅原邦城 訳、學藝書林。
- 64 現存しているルーン遺物は5000点程度である（その大多数がスウェーデンにある）。
- 65 藤森緑（2013）『ルーン・リーディング』魔女の家 BOOKS。
- 66 竹内茂夫：「布教の中で自分たちのラテン文字を各地に普及させていったと考えることができます」 in 『ニュートン』（2008）5月号、22頁。
- 67 『ルター聖書』（1984）
- 68 Metzger（1966）
- 69 Metzger（1966:88）：特にオリゲネスについては次のように言われている：「も

し教父が同一箇所を1度ならず繰り返して引用する場合、しばしば記憶から引用し、違った形になるであろう。オリゲネスはこの点で悪名高い。というのは、彼は同じ聖書箇所を全く同じことばで2度引用することは、ほとんどないからである」(Es geschieht oft, daß ein Kirchenvater nach dem Gedächtnis ein und dieselbe Stelle in voneinander abweichenden Formen zitiert. In dieser Hinsicht ist Origenes berüchtigt, denn er zitiert eine Stelle selten zweimal in genau denselben Worten.)

70 Metzger (1966)

71 キリストの生誕伝説は「岩の中の太陽」という神話モチーフにその起源を有すると考えられるのではないかという説がある。このモチーフは確実にインド・イラン語派起源であり、さらに言えばインド・ヨーロッパ語族に共通であった可能性も否定できない。そもそもこうした種類的神話モチーフは世界中に普遍的に存在しうるものである。古の時代より世界各地で太陽は崇められ、崇拜と伝統は信仰を形成してきた。太陽神といえばギリシア神話・エジプト神話が注目されるが、太陽の消失にまつわる神話は世界中に散在する。この太陽の消失に伴う洞窟における誕生神話というのは、岩から生まれるミトラ (*petra genatrix*) を思い起こさせるものである。すなわち、ローマ時代、隆盛を極めた、ペルシア起源のミトラの密儀は人工の洞窟である半地下神殿 (*spelaeum*) で行われていた。ミトラ教には確かに救済宗教として当時のさまざまな宗教要素が混入しているのが認められるのであるが、その中でもっとも鮮明なのはペルシア的な要素である。こうした洞窟における神もしくは救世主生誕のモチーフに関し、ミトラのものがキリスト教に影響を与えたと一般的に考えられている。ミトラの「岩からの誕生」モチーフがイラン的なのか、あるいはインド・イラン的なのか、はたまたインド・ヨーロッパ的なのか、言語や文化の壁を越えてユーラシアの諸民族に共通なのかを見極めることは決して容易ではない。しかしミトラの岩からの誕生と関係のある詩句はインドの『リグ・ヴェーダ』にも見受けられるので、少なくともそれがイラン固有というよりはインド・イラン語派に共有されていた観念であるとは言えそうである。元々、ミトラ神はアリア人の古い神話に登場する「光明の神」であり、イランの『アヴェスタ』においてもインドの『リグ・ヴェーダ』においても登場する有力な神である。ゾロアスター教でミトラは「ミフルヤズド」(中世ペルシア語)と呼ばれ重要な役割をもち、多数の神々のなかでも特別な位置付けにあった。ミトラ教はメソポタミア・インド・西域・中国などにも流布していたとされる。ミトラ信仰は

ギリシアやローマにも取り入れられ、ギリシア語形・ラテン語形でミトラス（ミトラース Μίθρας Mithras）と呼ばれ、太陽神・英雄神として崇められた。このように、本来ミトラ教は、インド・イランの古代よりの神話に共通する、太陽神ミトラを主神とする宗教である。

太陽神モチーフの神話においては、太陽は朝になると地下世界ヴァルナの石の家 (harmya-) から出て、地上に姿を現わすとされる。つまり、日々新しく生まれ変わるのである。神は岩 (asman) から生まれる。『リグ・ヴェーダ』の詩句 (4. 40. 5):『アグニが「水から生まれ、牝牛から生まれ、天則から生まれ、岩から生まれる」とされていた』とは、朝に東の空から太陽が昇る様子を描いていると解することができる。この場合、牝牛とは太陽神スーリアを育む曙の女神ウシヤスということになろう。岩から生まれるスーリアの姿はミトラの誕生に重なってきて、インドとイランの言語・文化的な緊密さを考慮してみれば、両神の誕生神話が一致することは偶然とは考えられない。そしてキリストの生誕伝説もまた「岩の中の太陽」という神話モチーフにその起源を有するのではないかという可能性が出てくるのである。こうした光輝を放つものを中核とした王権のイデオロギーあるいは聖人伝がユーラシアの諸民族、とりわけインド・イラン語派とローマ人のもとで発達を遂げ精緻な神話に結晶しているのは事実である（日本神話で、スサノオの横暴に怒ったアマテラスが天岩戸に籠もってしまい世界が暗闇になってしまうというように、太陽の消失は世界の太陽神話共通のテーマとなっている）。いずれにしても、太陽にまつわる自然現象を説明するのに太陽の誕生（もしくは消失）は欠くことのできないテーマなのである。

ギリシア神話は、印欧神話の一つとして、聖書と並ぶヨーロッパ精神の源流である。印欧語圏を中心に創造神話の成り立ちについて考察してみると、どの神話にとっても創造の物語は欠くことのできない要素と考えられる。現在に伝わるギリシア神話は、ヘレニズムの影響を色濃く受けている。ギリシア神話の創造神話はよく知られているように次の如くである。

はじめに混沌（カオス）が生まれ、カオスの中から大地ガイアと地底の世界タルタロスと愛エロスが誕生した。[中略] ガイアは、天ウラノスと海ポントスを生んだ。ウラノスは全世界を支配しガイアと交わり、[中略] その後、ウラノスとガイアの間、ティターン神と呼ばれる男女合わせ 12 人の神々

が生まれた。長兄はオケアノスで末弟はクロノスである。ガイアはティターン神たちに父であるウラノスを襲うように言い、恐るべき金属の鎌を造り与えた。クロノスはこの鎌でガイアと交わろうとして降りてきたウラノスの男根を切り取り海に投げ込んだ。そのため、大地ガイアにウラノスの血が注がれ多くの神や怪物が誕生して、神々を悩ませた。海に捨てられた男根から出た精液の泡から、愛と美の女神アフロディティ（ビーナス）が生まれた。こうして、全世界の支配権はウラノスからクロノスに移った。[中略]ガイアと去勢されたウラノスは、クロノスに「自らの子により、支配権を奪われる」と予言したので、クロノスは自分の子どもをすべて呑み込むようになった。クロノスは、姉妹である女神レアと交わり、生んだ子たちはヘスティア・デメテル・ヘラ・ポセイドンらであった。これらの子どもは生まれるとすべてクロノスに呑み込まれてしまった。最後に生まれたのがゼウスである。レアは、ゼウスが生まれるとすぐに洞穴に隠し従者たちに育てさせた。クロノスには、大石を子どもと偽って渡し呑み込ませた。ゼウスが成長すると、ガイアの力添えを得て、クロノスを騙して吐き棄を飲ませ、いままで呑み込まれた、ゼウスの兄弟たちを吐き出させた。その兄弟たちがティターン神族との戦いに勝利し、反逆のティターン神族をタルタロスに幽閉した。こうしてゼウスが全世界の支配者・神々の王となった。

72 塩野（2005:123-224）

73 塩野（2005:211）

74 当時の文化の中心地、まさにこの都市でユダヤ教徒たちが生み出した『旧約聖書』の「七十人訳」テキスト（ギリシア語）が、キリスト教徒たちによって用いられ、このテキストに基づいて、ガリラヤのイエスが救世主メシアだと宣言されるようになった。（秦 2018:205）

75 2世紀になっても「七十人訳」聖書の構成文書は確定されていなかった。なお、紀元前1-2世紀頃（成立年代不明）の「アリストテアスの手紙」に伝えられる伝説によると、「七十人訳」聖書は、紀元前250年頃プロトレマイオス2世フィラデルフォス（紀元前309-247年）が国立図書館のために律法書を翻訳しようと思いたち、イスラエルの各支族から6人ずつ（エルサレムの祭司長に）選ばれてアレクサンドリアに送られた72人の長老たちが72日かかって訳出した作品である。訳者みなを持ち寄り会して確認してみると翻訳のすべての箇所が一致していたというエピソードなのである。この話は、靈感による翻訳の不可謬を

語るものであろう。ただし、この言い伝えの史的な根拠は薄弱で、実際はおそらく、成立年度を異にする一つ一つの文書の翻訳が集大成されたもの（紀元前132年頃）であろうと考えられる。

76 秦（2018:4）

77 このリストは、オリゲネスが著した『詩篇』第一編の注解の中や、エウセビオスの『教会史』（6-25-2）の中に見られるものである。

具体的に22の文書とは以下のものである。

- ・出エジプト記
- ・レビ記
- ・民数記
- ・申命記
- ・ヨシュア記
- ・士師記
- ・ルツ記
- ・サムエル記（上・下）
- ・列王記（上・下）
- ・歴代誌（上・下）
- ・エズラ記
- ・ネヘミア記
- ・詩篇
- ・ソロモンの箴言
- ・伝道の書
- ・雅歌
- ・イザヤ書
- ・エレミア書
- ・ダニエル書
- ・エゼキエル書
- ・ヨブ記
- ・エステル記

79 <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B7%E3%83%8A%E3%82%A4%E5%86%99%E6%9C%AC>

80 ヘレニズム時代（公用語はギリシア語）、ユダヤ人の中にはすでにヘブライ語

を解さない人も現われ始める。そこで当時の学問の中心地アレクサンドリアで『旧約聖書』のギリシア語への翻訳が開始された(「七十人訳聖書」)。この「七十人訳聖書」は紀元前3世紀前後より次々と写本が作られていった(ヘブライ語原典に並ぶ権威をもたせようとする人々の支持基盤があった)。ただし、宗教改革のルターなどが翻訳の元にしたのは、ヘブライ語で書かれた「マソラ本文」(Masoretic Text: ユダヤ教社会に伝承されてきたヘブライ語聖書)であり、現在、手にしている『旧約聖書』の大半はこの「マソラ本文」に基づくものである。同じ『旧約聖書』といっても、「七十人訳聖書」と「マソラ本文」には記述に異なる部分があるわけである。その有名な箇所としては、次のものがある。

Behold, a virgin shall be with child, and shall bring forth a son. (マタイ 1:23)

「見よ、処女(おとめ)がみごもっている。そして男の子を産む」(新改訳)初期キリスト教会は通常「七十人訳聖書」を用い、『新約聖書』の記者も『旧約聖書』から引用する時、この「七十人訳聖書」によっていた。上の「マタイ」(1:23)の a virgin はギリシア語の hē parthénos の訳である。本来的には、ヘブライ語原語の hā'almāh は「(既婚・未婚を問わず) 適齢の女」を意味する語であった。

81 教会著作家が引用している部分も含めての仕事である。

82 秦 (2018:312-314)

83 秦 (2018:367):「われわれは軽々に『オリジナル・テキスト』と口にするが、聖書学のテキスト探求に限って言えば、オリジナル・テキストなど存在しない、と割り切った方が良さそうである」。

84 『旧約聖書』・『新約聖書』のギリシア語写本(大文字のアンシャル体:丸みを帯びた大文字)です。759葉からなる羊皮紙によるコーデックス(冊子体)の形をとっている。なお、紀元前1世紀頃までは羊皮紙もパピルスのように巻物にされていた。巻物からコーデックスに移るのは5世紀と言われている。

85 秦 (2018:279)

86 <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%83%AC%E3%82%AF%E3%82%B5%E3%83%B3%E3%83%89%E3%83%AA%E3%82%A2%E5%86%99%E6%9C%AC>

87 カーギル (2018:10)

88 カーギル(2018:292):「(聖書とは)カナンの神を信仰する人々が現実の社会経済・地理・政治・軍事情勢と、個人のイデオロギー、アイデンティティ、哲学との折り合いを付けようとした三千年の営みの産物であり、あえて神の問題に取り

- 組み、生き残って思索を書き留めた古代の人々の所産なのだ」。
- 89 信仰を学識に裏打ちされたものにすることができる。カーギル (2018:293):「聖書が力を発揮するのは、[...] 聖書を考え、評価し、信者であれば、聖書を生活で実践する時だ」。あるいは、カーギル (2018:293):「(聖書とは) 神が目下の困難から自分たちを救済すると信じる信者の奮闘の歴史の記録、日常生活を懸命に生きる姿を通じて今日の信者を励ます記録」。
- 90 加藤 (1999:294-295)
- 91 ブッシュ (2009:43-44):「バルトによれば、神学は、ピリポがしたのと同じように [...] 人はこう問うことができるであろう。信えていることがおわかりになりますか、と。神学は、読まれたこと、信じられたことがわかる (理解できる) ように手助けしようとする」。エルサレムの外に福音を宣べ伝えた最初の旅(の1つ)をした宣教師。この引用の箇所、イザヤ書の預言に没頭しているその人に、ピリポは、イエスがどのようにしてイザヤ書の預言を成就したかを説明した。
- 92 2 箇所ともに Lutherbibel (1984)
- 93 以下、次のように続く:8:36 道を進んで行くうちに、彼らは水のある所に来た。宦官は言った。「ここに水があります。洗礼を受けるのに、何か妨げがあるでしょうか。」8:37
- 94 ピリポが、「真心から信じておられるなら、差し支えありません」と言うと、宦官は、「イエス・キリストは神の子であると信じます」と答えた。8:38 そして、車を止めさせた。ピリポと宦官は二人とも水の中に入って行き、ピリポは宦官に洗礼を授けた。8:39 彼らが水の中から上がると、主の霊がピリポを連れ去った。宦官はもはやピリポの姿を見なかったが、喜びにあふれて旅を続けた。8:40 ピリポはアゾトに姿を現した。そして、すべての町を巡りながら福音を告げ知らせ、カイサリアまで行った。いずれにしても、ピリポが考え及ばなかった神の計画であったという趣旨である。ピリポが考えも計画もしなかったということで、ここには福音の広がりの可能性が示唆されている。後に彼は宣教師になったのである。
- 96 カーギル (2018:292):「聖書は、神が歴史に介入し、この世のこの時代に生きる自分たちを導いていると信じる人々の歴史を記述する目的で、長い年月をかけて、追加され、編集・再編され、書き直された年代記である」。
- 97 第1回ニカイア公会議で採択される。初期教会会議の中では最も有名なもので

ある。

98 カーギル (2018:10)

99 カーギル (2018:11)

100 地中海東部の交易都市ウガリトの主神であるエルは『旧約聖書』のヤハウェのモデルになったという説がある。これが事実ならば、セム的一神教(ユダヤ教・キリスト教・イスラム教)はこの港湾都市で生まれたということになる。

101 法治国家(書きものである権威ある法典を目の前の為政者よりも高く評価する)の誕生・確立と、『聖書』の起源は同じプロセスを経たものと考えられる(カーギル 2018:10)。

102 現代人から見ると、初期キリスト信者たちが信仰告白をして拷問を耐えたわけである。現代のキリスト教徒はその人たちの重い戦いの上にあるのである。

103 「『七十人訳聖書』の翻訳の原本となったヘブライ語テキストは現存しない。[…]『七十人訳聖書』の最初のテキストと断定できるギリシア語テキストも残っていない」(秦 2018:4)。

104 『聖書』は一般の古典とは「区別されたもの」(ヘブライ語の語源)という意味で聖別され、聖なる書として扱われてきた。

105 カーギル (2018:293):「聖書そのものが神聖なのではなく、人々が神聖と見なすゆえに神聖なのだ」。

106 『新約聖書』に収められている文書群の中のおのおの一つずつの文書はいずれも『新約聖書』という題名をもつ文書集の一つとなることを意識して書かれたわけではない(加藤 1999:50)。

107 『聖書』には神を巡ってのテキストが集められているということを基本的に認めるにしても、具体的にはさまざまなアプローチがあり、さまざまな関わり方、さまざまな理解の程度がある(加藤 1999:51)。

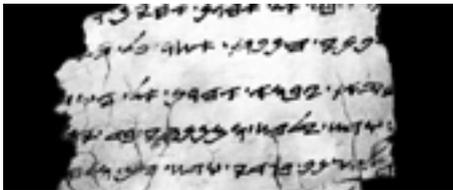
108 紀元前1世紀から紀元後1世紀にかけて「神のこぼ」を作り上げる言葉は実際にはいくぶん流動的で[…]固定化していなかった(カーギル 2018:256)。

109 加藤 (2016:22):「聖書の長い歴史の中で『七十人訳聖書』だけはそれ自体、権威あるものとして位置づけられる」。なお、第一神殿(ソロモン神殿、紀元前10世紀にソロモン王が建設した神殿)の崩壊(紀元前586年)を契機に『ヘブライ語聖書』が誕生したように、第二神殿(バビロン捕囚からの解放後の紀元前515年にゼルバベルの指揮で再建された神殿)の崩壊(紀元後70年)

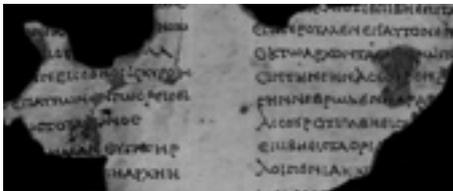
によって『新約聖書』が生まれた（カーギル 2018:272）。

- 110 『旧約聖書』はもともと口伝による教えを書物化したものである。
- 111 正典化（今日の聖書に含まれることになる文書を選ぶプロセス）はローマで行われた。ユダヤ教徒・キリスト教徒にとって『聖書』は、神が人類に発したメッセージの記録であり、正典化の過程は多くの人が考えるよりずっと煩雑だ（カーギル 2018:276）：「聖書は政治的なプロセスの産物である」。
- 112 正典化のプロセスの時期には、殉教を生じさせるような、ローマ帝国の禁教政策があったのである。例えば、ネロ帝（54年-68年）やディオクレティアヌス帝（284年-305年）などの迫害は有名である。キリスト教弾圧の当初の目的が徹底したものであったことは皇帝勅令が4度も出たことからわかる。一方、キリスト教を擁護・公認（331年「ミラノ勅令」）した「コンスタンティヌス帝（272年～337年）を讃美する者は絶えなかった。[……] キリスト教を弾圧した暴君マクセンティウスとリキニウスを征伐し、キリスト教徒に集会の自由を与え、教会の名誉を回復し、ローマ帝国のいくつかの都市に豪華な教会堂を建て、異教を禁じ、偶像を破壊し、[……] 司教たちがコンスタンティヌスによって代表される帝国権力に急接近し、キリスト教の作家や煩雑辞家が臆面もなく彼を讃美してみせたのは、けだし当然だったのかもしれない」（エウセビオス 2004:336）。この引用箇所は、宗教関係者が政治権力に影響を受けることを免れえない事象として興味深い。「ミラノ勅令」に対してもエウセビオスは「神が万事においてわれわれにいつもの心遣いと慈悲深さを示してくれる」と語っている。また、キリスト教側に、真の宗教を迫害する者は惨めな最期を迎えるが、その擁護者は繁栄するという見方があったことは確かである。ある日、コンスタンティヌス帝が司教たちを食事に招き「汝らは教会の中の司教であるが、予はたぶん神によって任命された教会の外の者の司教である」と発言したことが知られている（エウセビオス 2004:365）。これは、司教権に対する皇帝権の優位さを表わすものであろう。なお、コンスタンティヌス帝は325年にニケーア公会議を開催し当時まだ確立していなかった教義を決定した。この公会議によって、イエスに人性を強く認めるアリウス派が異端となり、イエスの神性を認め三位一体説を唱えるアタナシウス派が正統教義となった（エウセビオスがコンスタンティヌスと接見する機会を得たのはこのニケーア公会議の場である）。
- 113 蛭沼（1972:1）

- 114 どの文書を正典とみなすかについて論理的な議論がなされたり、公式の決定が行われたりすることはなかった（加藤 1999:68-69）。
- 115 加藤（1999:87）
- 116 特に古い時代の文献は流動性こそがその本質的特徴のように言われることがよくあるが、テキストのジャンルによるところが大きい。聖書の関連のテキストはその性格上、不変でなければならないし、法律書などは拘束力をもつために改変できない字句内容であることが求められる（プリンカー・フォン・デア・ハイデ 2017:237-238）。プリンカー・フォン・デア・ハイデ（2017:244）：「中世の文献テキストは、著作権によって一文字たりとも勝手に変えることのできない現代のテキストとは全く違う」。
- 117 『聖書』の本文テキストは初期から頻繁に書き換えられてきた。長年にわたって変化してきたのである（カーギル 2018:234）。「死海文書」を見ると、初期の聖書本文が変化している様子を知ることができる。



「死海文書」（ヘブライ語）



「死海文書」（ギリシア語）

- 118 加藤（1999:101）：「聖書は早くからさまざまな言語（ラテン語・シリア語・コプト語など）に翻訳されている。注意すべきは、『新約聖書』に関して、オリジナルから派生したギリシア語写本がまとめて残されているのが4世紀以降であるのに対し、翻訳テキストは場合によってはそれ以前のギリシア語のテキストを底本としていると考えられるケースがあるということである」。
- 119 小文字の写本が現われるのは中世になってからで9世紀以降である。

- 120 Metzger (1968:13) “Manchmal war dadurch der Sinn eines Satzes zweideutig, weil die Worteinteilung unsicher war. Im Englischen wird man den Text *godisnowhere* entweder lesen: *God is now here* (Gott ist jetzt hier) oder *God is nowhere* (Gott ist nirgends), je nachdem, ob man an Gott glaubt oder nicht.” 「語の区切りがはっきりしないので、時には文の意味も不明瞭になることがあった。例えば英語で GODISNOWHERE と綴れば、神を信じる者と信じない者とは全く逆の意味に読むだろう。前者は「神は今ここにいる」(*God is now here*) と読み、後者は「神はどこにもいない」(*God is nowhere*) と読むだろう。
- 121 新約の場合、特定の原理ではなく「無原理の原理」(*Prinzip der Prinzipienlosigkeit*) と言われることもある (Aland 1962:10)。
- 122 蛭沼 (1972:143)
- 123 橋口 (2008: 14) : 「最初の使徒たちはすべて敬虔なユダヤ人であった。(中略) 使徒たちは旧約聖書の表象を究明し、特に啓示による証明 (イザヤ書 53 章「主の僕」・ダニエル書 7 章「人の子」) がその後に続く苦しみを担う者としてイエスを理解した」。
- 124 一方「使徒的」という用語は使徒(エルサレム教会において指導的な立場にあった者たち) ということばから派生しているのは確実だが、その用い方に関し必ずしも客観的な基準が明確に設定されているわけではない (加藤 1999:65-68)。
- 125 もともとキリスト教を迫害するファリサイ派(ユダヤ教の一派)に属していた。
- 126「ヘブライ人への手紙」(パウロ作) は長い間その使徒性が認められなかった(最終的に正典に含まれることになる)。
- 127 『ルター聖書』 (1984)
- 128 初期キリスト教の拡張期に、その指針として、信者は権威に裏打ちされた教義、すなわち、使徒直筆の書物に記されている教えを読めば、それだけで正しく導かれるということになるであろうか。初期のキリスト教徒には知られていたことであるのだが、使徒の多くは文盲で、実際には彼らは文字を書くことができなかった。つまり、作者とされる人びとは多くの場合、現実にはテキストを執筆できなかった (アーマン 2011:16)。
- 129 『新約聖書』の誕生は完全にローマ帝国の出来事であり、イエスと初期教会の物語の舞台となるローマという文脈と分かちがたく結びついている。紀元 1 世紀・2 世紀初頭は、ユダヤおよびローマ史の上で『新約聖書』全体

の形成に寄与した時代である。「福音書」は、ヘロデ王統治のイエスの誕生（マタイ 1:2）、あるいは、クイリニウス治下のイエスの誕生（ルカ 1:2）を描き、ポンティオ・ピラト総督と四分領主ヘロデ・アンティパスの面前でのイエスの裁判と処刑を記している（カーギル 2018:271）。

- 130 参考までに、「使徒言行録」（8:1-3）より、サウロがとった行動がわかる箇所を以下に挙げておく。8:1 サウロは、ステファノの殺害に賛成していた。その日、エルサレムの教会に対して大迫害が起こり、使徒たちのほかは皆、ユダヤとサマリアの地方に散って行った。8:2 しかし、信仰深い人々がステファノを葬り、彼のことを思って大変悲しんだ。8:3 一方、サウロは家から家へと押し入って教会を荒らし、男女を問わず引き出して牢に送っていた。

8:1 Saulus aber hatte Gefallen an seinem Tode. Es erhob sich aber an diesem Tag eine große Verfolgung über die Gemeinde in Jerusalem; da zerstreuten sich alle in die Länder Judäa und Samarien, außer den Aposteln. 8:2 Es bestatteten aber den Stephanus gottesfürchtige Männer und hielten eine große Klage über ihn. 8:3 Saulus aber suchte die Gemeinde zu zerstören, ging von Haus zu Haus, schleppte Männer und Frauen fort und warf sie ins Gefängnis.

- 131 加藤（1999:204-205）

132 ヨハネ福音書（8:6）に「イエスは身をかがめて指で地面に何か書いていた」とある。イエスを書くという行為を行っていたことが記されている唯一の箇所である（ただし、文字であるかどうか判明していない）。

- 133 ルカ福音書（1:1-2）：「最初から目撃して、み言葉に仕える者となった人々が私たちに伝えたとおりに、多くの人が物語を書こうとしている」。ルカ自身も実際「ルカ福音書」を書いた。

134 加藤（1999:208-210）。パウロは、生前のイエスの言行にはむしろ価値を見出さず、十字架のイエスだけが重要であると考えた。

- 135 「ヘブライズムのキリスト教」はヘブライ語を話すユダヤ人（ヘブライスト）たちによって、パレスチナ地方、特にエルサレムで成立したのに対し、「ヘレニズムのキリスト教」はギリシア語を話すユダヤ人（ヘレニスト）たちによって（エルサレムで成立したが）パレスチナ以外の場所で生まれギリシア語を母国語とするユダヤ人キリスト者たち（ステファノ他）のグループの間に広まっていた。

- 136 使徒行伝（6: 8 以下）には、ヘレニストのグループの指導者格と思われるス

テファノがエルサレム神殿に対して（つまり十二使徒に関係するユダヤ人）ラディカルな態度を示し殺されてしまうという話が記載されている。

137 加藤（1999:270）

138 加藤（1999:271-276）。マルコ福音書の著者はヘレニストのグループに属していた。したがってギリシア語で書いたのである。[...] マルコ福音書がギリシア語で書かれたことの直接の動機には、当時のギリシア語圏（ヘレニズム世界ないしローマ帝国の世界）全体にとってのキリスト教の意義が意識的に考慮されていたといったことは存在しない（加藤 1999:273）。

139 聖書の理解を深めるにはやはり注釈書（テキストを個々の点にわたって検討している参考書のこと）が必要である。先行研究を広く扱っているものが好ましい。

140 秦（2018:198）：「キリスト教会は、二世紀になると、多数の物書きを輩出し、多数の文書を生み出す。そしてまた、この世紀に入ると、『ただ一つの聖書』をつくる動きが盛んになり、[...] 現在の新約聖書に組み込まれたものは、最終的には『真正なもの』と見做されたものである」。

141 1世紀に生まれ3世紀から4世紀にかけて地中海世界で勢力を持った宗教・思想。物質と霊の二元論に特徴がある。

142 新約聖書「外典」の概念は、旧約聖書「外典」の意味内容がそのまま形式的に『新約聖書』の諸文書に当てはめられたものである。

143 正典の選別に関しては、パウロの解釈に倣って、使徒伝承を用いて主であるイエスの言葉の権威を確かに記しているものというのが選定基準として掲げられている。

144 川村 他（1976:6）

145 外典とは本来的には「七十人訳聖書」には含まれているが「ヘブライ語聖書」には存在しない諸文書のことを指す用語である。なお、「七十人訳聖書」が作られた動機であるが、ギリシア人に（ユダヤ人の歴史を正しく知ってもらうべく）モーセ五書（トーラー）をきちんと読んでもらうためであるという説もある（秦 2018:34-35）。



ドイツのケルンにあるゴロッケンガッセ・シナゴーク  
(Glockengasse Synagogue) にあるトーラー

146 アレクサンドリア（エジプト）は『聖書』にとって重要な町である。この地で、ヘブライ語聖書がヘブライ語（とアラム語）からギリシア語に翻訳され、外典（ヘブライ語聖書の正典とは認められない）を構成する多くの書が生み出されたからである（七十人訳聖書：前1世紀から紀元後1世紀のユダヤ人にとって実質的な聖書）。なお、エルサレムの主教だったキュリロス（在位：350-386年）は「ヘブライ語聖書のギリシア語への翻訳は、靈感によるものだと訳の分からぬことを言っている」という（秦 2018:217）。

147 荒井（1997:11-12）

148 「新約外典」のリストは以下の通りである。

- ・パウロ行伝
- ・ペトロ行伝
- ・パウロ・テクラ行伝
- ・ペトロの黙示録
- ・パウロの黙示録
- ・ディダケー（十二使徒の教え）
- ・バルナバの手紙（バルナバ書）

- ・クレメントのコリントの信徒への手紙
- ・イエス・キリストとエデッサ王アブガルスの手紙
- ・使徒パウロのラオディキアの信徒とセネカへの手紙
- ・イグナティオスとポリカルボスの手紙
- ・エジプト人による福音
- ・ユダヤ人による福音
- ・ユダによる福音書
- ・ニコデモによる福音書（ピラト行伝）
- ・ペトロによる福音書（ペテロ福音書）
- ・救い主による福音
- ・ヤコブによる原福音（ヤコブ原福音）
- ・トマスによるイエスの幼時物語
- ・トマスによる福音書
- ・マタイによるイエスの幼時福音
- ・マルコによるイエスの幼時福音
- ・アラビア語によるイエスの幼時福音
- ・マリアによる福音書（マグダラのマリア福音書）
- ・フィリポによる福音書
- ・ヘルマスの牧者
- ・イエス・キリストの叡智
- ・シビュラの託宣

なお、『旧約聖書』に関しては、伝統的に、ヤムニア会議以前に成立したギリシア語訳の「七十人訳聖書」ないしその翻訳を旧約聖書の正典とする。「旧約外典」の一覧は次の通りである。

- ・第三エズラ書
- ・第四エズラ書
- ・トビト記
- ・ユディト記
- ・エステル記補遺
- ・ソロモンの知恵
- ・シラ書（集会の書、ベン・シラの知恵）
- ・バルク書

- エレミヤの手紙
- ダニエル書補遺
  - スザンナ
  - ベルと竜
  - アザルヤの祈りと三人の若者の賛歌
- マナセの祈り
- マカバイ記 1
- マカバイ記 2
- マカバイ記 3
- マカバイ記 4
- 詩篇 151
- ヨブ記補遺
- エノク書

149 グノーシス派に遡る、もしくは、この派によって用いられた諸文書のことである（荒井 1997:14）。

150 荒井（1997:18）

151 1945年にナグ・ハマディ（エジプト）で農夫によって発見された文書の中にあった、コプト語で書かれたイエス語録である

152 「ルカ」（2:41-51）には12歳のイエスが描かれている。

153 別の例をもう1つ引く。「トマスによるイエスの幼時物語」の第9章からである：『イエスは屋根の上の露台で友人と遊んでいると、一人が屋根から落ちて死んだ。他の子供は逃げてしまうが、死んだ子の親がやってきて、イエスにお前が突き落としたんだらうと怒る。親があまりしつこく言うので、イエスは死んだ子の傍ら立ち「おいゼーノン、起きて言っておくれ、僕が君を突き落としたのかい」と呼びかけると、倒れていた子供が起き上がった。生き返った子供は「いいえ、主よ、あなたは突き落としたのではなく、生き返らせたのです」と答えたので、両親は感謝してイエスを拝んだ』。この箇所、下線部は「マルコ」（15:3）を思い起こさせる（「マルコ」（15:3）：「祭司長たちはイエスを厳しく訴えた」）。すなわち、イエスを引き渡されたピラトが「あなたはユダヤ人の王か」と尋ね、イエスが「その通りです」と答える場面である。

154 荒井（1997:19-20）

155 ユダヤ戦争（第一次：66-70年。ローマ帝国への抵抗）前後から始まったと考

えられる。

- 156 「トマスによるイエスの幼時物語」は当時、人気を博し、シリア語・ラテン語・エチオピア語・古スラヴ語などに訳されたほどである。
- 157 エラスムスの読みが後の公認本文の印刷本の中に生きのびることになる。
- 158 Metzger (1968:75-76) : “Toward the close of the fourth century the limitations and imperfections of the Old Latin versions became evident to the leaders of the Roman Church. It is not surprising that about A.D. 382 Pope Damasus requested the most capable Biblical scholar then living, Hieronymus, to undertake a revision of the Latin Bible. Within a year or so Hieronymus was able to present Damasus with the first-fruits of his work – a revision of the text of the four Gospels, where the variations had been extreme.” 「4世紀の後期になると、古ラテン語訳の限界や不完全さが西方教会の指導者たちに明らかになってきた。したがって、382年頃、教皇ダマススが、その当時の最もすぐれた学者ヒエロニムス (Hieronymus) に命じて、ラテン語聖書の改版を企画させたのは当然のことであった。1年ほどのうちにヒエロニムスは、彼の業績の最初の結実をダマススに提出した。これは異説が最も多かった4福音書の本文を改訂したものである。」
- 159 使用した主な2写本はいずれも12世紀の作であった。
- 160 友人のロイヒリンから借りたものである。
- 161 Metzger (1968:96-103)
- 162 その受け入れられ方はまちまちであった (ヨーロッパ中でよい売れ行きを示しながらも、強い批判にさらされもした)。
- 163 Metzger (1968:100)
- 164 ルターは次のような賛美歌の歌詞でも知られている:「我が神は強固な砦 (Ein feste Burg ist unser Gott)」。
- 165 ルターが聖書の翻訳を通して標準語の確立に向けて果たした役割は大きい。ルターが目指したわけでなくとも、彼の功績はこの時期、ドイツ語の統一文章語の成立の決定的な要因となったことは間違いない。最初のうちは、超地域語レベルにおいても、例えば正書法においても、あるいは、屈折・統語法においても、統一性が見られず、同一テキスト内ですら揺れが並存しているくらいであった。
- 166 ユダヤ教社会に伝承されてきたヘブライ語聖書 (9世紀に完成) のテキストのこと (紀元前3世紀頃より訳され始めたギリシア語訳の方がかえって古い

と言える)。ユダヤ教の成立以後、時代を経るごとにさまざまな編集が加えられてきた。近年の「死海写本 (Dead Sea Scrolls)」が発見されるまで、ヘブライ語で書かれたものとしては最古の写本であった。



マソラ本文 (ヘブライ語)

- 167 現在、私たちが手にしている『旧約聖書』の大半はこの「マソラ本文」(Masoretic Text) に基づくものである。『旧約聖書』のギリシア語への翻訳である「七十人訳聖書」に依るのではない。堀川 (2018:104) : 「ルター訳は原典がもつヘブライズムのゲルマニズム化 (ドイツ文化)」も参照のこと。
- 168 なお、英語の聖書に関して次の指摘がある。堀川 (2018:101) : 「英訳聖書は基本的に欽定訳聖書の改訂であるため、オリジナルのヘブライ語聖書の精神を呼吸することがない。[...] それゆえに英語圏の読者はヘブライ語聖書が持っている力強さを知る余地がないのである」。
- 169 『新改訳聖書』・Hamp (1979) による。
- 170 プリンカー・フォン・デア・ハイデ (2017:12)
- 171 「指3本で書き身体全体を痛める」という嘆きの言い回しが残っている。

- 172 中世初期の写本文化がその頂点に達したのは9世紀から11世紀にかけてのいわゆるカロリング朝ルネサンスにおいてである（ペティグリー 2017:22）。
- 173 ペティグリー（2017:8）
- 174 プリンカー・フォン・デア・ハイデ（2017:57-58）
- 175 本を制作するため材料（インクなど）、高度な書記文体、文学等に関心をもつ社会、財力に富んだパトロン、これら全てが揃ってはじめて、宮廷（詩人など）のエンターテインメントが成り立ち、その作品をまとめて写本に書き下ろし後世に伝えるという文芸活動が成立する（プリンカー・フォン・デア・ハイデ 2017:124）。
- 176 印刷術の獨創性は個々の文字を独立した活字として作れば、それらを組み合わせることで文章を無限に作ることができ、また活字も繰り返し再利用できるという点に気付いたことである（ペティグリー 2017:49）。
- 177 印刷術が世に現われたのはちょうどドイツの木版芸術の黄金時代に当たっていた（ペティグリー 2017:65）。
- 178 修道院の写字生たちは聖書・祈祷書を製作していた。修道院における聖書の生産が頂点に達したのは12世紀のことで、この時期までにマーケットの需要は実質的に満たされていた（ペティグリー 2017:23）。
- 179 11世紀末までの俗語文学は、口承で伝えられることがほとんどだったし、またそうされるのがふさわしいのだと考えられていた。詩人は物語を、書写されたテキストを使うことなく歌い語った（プリンカー・フォン・デア・ハイデ 2017:148）。
- 180 シュミット（2004）
- 181 東方貿易の拠点であったヴェネツィアが扱う製品の中に紙があり、ヴェネツィアは14世紀に製紙業界における主導的地位を占めた。1469年にヴェネツィアに印刷術が到来した際、ヨーロッパの他のどこよりも急速に発展した理由はまさにここにある（ペティグリー 2017:90）。
- 182 活版印刷の技術は、マインツに発して驚くべきスピードでドイツの帝国諸都市に拡散し、アルプスを越えるルネサンスの震源地イタリアに達する。さらにフランス・低地諸国・イングランド・ポーランド・ボヘミアにまで至った。1490年頃には印刷機は200を越える都市に設置され、この新たな技術はヨーロッパ大陸の隅々にまで広まっていた（ペティグリー 2017:1）。
- 183 グリムは名詞の語頭の文字を大文字書きすることはない。

- 184 こうした書物は聖書のさまざまな箇所・祭式書・奉読テキスト・共観福音書などを対象としている。中世において『聖書』を部分的に翻訳したものは正典化されたラテン語的な模範からは少し離れたものとなることがあった。
- 185 このラテン語（ヴルガータ *Vulgata*）による『聖書』の刊本がヨーロッパでの最初の印刷本である。このラテン語ヴルガータ『聖書』は、いわば大衆訳ともいべきもので、ヒエロニムスらによって、それまでの古ラテン語訳に大改訂を加えた意識で405年に完成した。中世に広く用いられ、1546年のトリエント総会議でカトリック教会の標準訳に決定された。
- 186 一般には「マザラン聖書」(*Mazarin Bible*)と呼ばれる。
- 187 プリンカー・フォン・デア・ハイデ (2017:86)
- 188 都市で、十分な支払いをしてくれる注文主と、作品を歓迎する民衆と、本を制作するための材料と書記が必要であった（プリンカー・フォン・デア・ハイデ 2017:99）。
- 189 これまであまり知られていなかった印刷時代の初期に刷られた書物に関して世界のどこに所蔵されているかの情報が、大量のデータを処理できる検索エンジン等のおかげで即座にわかるようになった（ペティグリー 2017:13）。
- 190 プリンカー・フォン・デア・ハイデ (2017:88)
- 191 出版社や書籍商は書籍の印刷を積極的に受け入れたが、この印刷本というのが、かつて写本文化を取り巻いていた親密で私的な世界をどれほど変容させてしまったのかを、彼らは理解できていなかった。写字生たちの世界は需要と供給が厳密に一致していた（ペティグリー 2017:82）。
- 192 印刷本は必ずしも写本よりも正確なテキストを提供しているわけではなかった。初期の印刷本は、かつてイタリアの写本が確立していた品質基準を満たしていなかった（ペティグリー 2017:92）。古典作家の真正テキストが入手可能になることを印刷術に期待した人文主義者たちからは印刷批判が起こった。
- 193 ペティグリー (2017:35-37)
- 194 ペティグリー (2017:43)
- 195 中世期（9世紀頃）では、ターティアン (*Tatian*) の福音書の翻訳や、オットフリート (*Otfried*) の福音書 (*Evangelienbuch*) がある。
- 196 そもそも、『聖書』の神聖なことばを卑俗な土着のことばに変えることは冒瀆的であり、また、『聖書』の翻訳がたやすく一般信徒の手に入れば、人々が勝手な解釈をしたり、教会での務めをおろそかにしたりするのではないかとい

う考えがあったからである。

- 197 ラテン語訳『聖書』（ヴルガータ *Vulgata*）からの訳出である。このシュトラスブルクでの出版が（ルターに先立ち）ドイツ語圏で最初のものであった。
- 198 「宗教改革の明けの明星」と言われる（寺沢 1969:11）。ヨークシャーに生まれ、オックスフォード大学で学び、同大学のバリオール学寮長に選ばれ、ラターワス（*Lutterworth*）で牧師になった。彼は、純粋な宗教的情熱に燃え、教会の腐敗、中でも高位聖書者の富裕な生活を攻撃し、社会を騒然とさせた。さらに教皇を批判したことによって、一切の公職から追放された。ウイクリフは、教会を本来の姿に戻すためには先ず『聖書』の理解から始めるべきだと考え、権威主義的な教会への反抗、および、無知な大衆の啓蒙を意図して、ラテン語ヴルガータ『聖書』の翻訳に着手した。
- 199 11世紀から14世紀半ばまでは（「詩篇」を除いて）『聖書』を翻訳する動きは見られなかった。
- 200 当時はヨーロッパ各国の教会で公認されていたラテン語訳『聖書』（ヴルガータ）に基づき、これを逐語訳ないし意識・翻案することが近代各国語訳と称されていたものであった。
- 201 堀川（2018:104）：「ルター訳は原典がもつヘブライズムのゲルマニズム化（ドイツ文化）」。
- 202 寺沢（1969:280-281）
- 203 ツヴィングリはルターと共に改革を行おうとしたが、教義の違い（エラスムスの影響を受け合理的に考える傾向）からルターの協力を得られず、旧教派（カトリック）と戦って戦死する運命となった。
- 204 なお、ツヴィングリのあと、フランソワ1世の弾圧から逃れるためにスイスにやってきたのが、フランス人宗教家のカルヴァン（*Calvin*）である。後世、ドイツの思想家マックス・ウェーバー（*Max Weber*）は、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を著し、カルヴァン派と資本主義成立の関連性を説いている。
- 205 私訳として注目されるべきものに、ブーバーの翻訳がある（*Buber-Rosenzweig*: „Die Schrift“, 4巻本）。

206 カトリック教会が公認している聖書が統一聖書 (Einheitsübersetzung) である。



207 イギリスでは「ウィクリフ訳」が最初の完訳『聖書』であり、写本ながら発行部数・普及度において、最初に出版された『聖書』と言える。

208 「ルター訳聖書」(1534年)を嚆矢とする。

209 代表的なものが「ティンダル訳新約聖書」(1526年)である。これは、エラスムスのギリシア語『新約聖書』を用い、ルターのドイツ語訳を参照している(寺沢1969:18)。

210 近代に入ってルター訳に強い影響を受けて種々の翻訳が試みられた。プロテスタントでは、「改革派教会訳」(1537年)が「議会制定聖書(Statenbijbel)」として19世紀末まで用いられた。カトリックでは「ルーヴァン聖書(1548年)」(改訳1599年)が挙げられる。現代語訳としては、「プロテスタント公認新訳」(1951年)と、フランスの「エルサレム聖書」に範をとった「カトリック新訳」(新約1961年)が広く用いられている。

211 イタリア語に関しては、13世紀以来、数多くの『聖書』翻訳があるが、古典的なものとしてはマルティーニ訳(1782-1792年)が最も広く用いられた。

212 シェークスピアの英語と並んで近代英語の性格を決定したと評される。

213 「欽定訳聖書」は、書き下ろしの訳ではなく、ティンダルの英訳に遡る16世紀プロテスタント訳の改訳であり、特に新約聖書に関してはその80~90%がティンダル訳を踏襲している(寺沢1969:81)。

214 ヘブライ語・ギリシア語の原典から直接、訳して、フランスのプロテスタント最初の『聖書』訳を完成させたのは、カルヴァンの甥オリヴェタンである。

215 テキストは、British & Foreign Bible Society “The Gospel in Many Tongues” (1954)に基づく。

## 参考文献

- 雨宮栄一 他 (2003) : 『カール・バルト説教選集 17』 日本キリスト教団出版局
- 荒井献 他 (1997) : 『新約聖書外典』 講談社文芸文庫
- 荒井献 他 (1998) : 『使徒教父文書』 講談社文芸文庫
- 朝岡勝 (2016) : 『ニカイア信条を読む』 いのちのことば社
- ATD・NTD 聖書注解刊行会 (1980) 『NTD 新約聖書注解』 別巻「マタイによる福音書」
- ブランケンベイカー、フランシス / 後藤・渋谷 訳 (1997) : 『イラスト早わかり「聖書」ガイドブック』 いのちのことば社
- プリンカー・フォン・デア・ハイデ、クラウディア / 一條麻美子 訳 (1997) 『写本の文化誌』 白水社
- ブルトマン、ルドルフ / 川端純四郎・八木誠一 訳 (1963) : 『イエス』 未来社
- カーギル、ロバート / 真田由美子 (2018) : 『聖書の成り立ちを語る都市 フェニキアからローマまで』 白水社
- クメール、M. & デュメジル、B. (2019) 『ヨーロッパとゲルマン部族国家』 大月康弘・小澤雄太郎 訳、文庫クセジュ (白水社)
- エウセビオス / 秦剛平 訳 (2010) : 『教会史』 上 講談社学術文庫
- フィリップス、E. (1994) 『アルザスの言語戦争』 右京頼三 訳、白水社
- 藤代泰三 (1989) : 『キリスト教史』 嵯峨野書院
- グラーフ、フリードリヒ / 片柳榮一 監訳 (2014) : 『キリスト教の主要神学者』 上 教文館
- グラーフ、フリードリヒ / 安酸敏眞 監訳 (2014) : 『キリスト教の主要神学者』 下 教文館
- グューティング、エバーハルト / 前川 裕 訳 (2012) : 『新約聖書の「本文」とは何か』 新教出版社
- ハーレイ、ヘンリー (2003) 『聖書ハンドブック』 聖書図書刊行会
- 原 征明 (2005) 「ヴァイキングとアングロ・サクソンイングランド再考 (1)」 『東北学院大学論集』 経済学、第 158 号、391-408 頁
- 原 征明 (2010) 「ヴァイキングとアングロ・サクソンイングランド再考 (2)」 『東北学院大学論集』 歴史と文化、第 46 号、133-144 頁
- 橋口倫介 監修 (2008) : 『キリスト教史』 (普及版) 朝倉書店
- 秦 剛平 (2000) : 『ヨセフス』 ちくま学芸文庫
- 秦 剛平 (2018) : 『七十人訳ギリシア語聖書入門』 講談社選書メチエ
- 蛭沼寿雄 (1972) : 『新約正典のプロセス』 山本書店
- 蛭沼寿雄 (1976) : 『ギリシャ、ローマ、ユダヤ、エジプトの史料による原典新約時代史』

山本書店

- 本田哲郎 (2006) : 『釜ヶ崎と福音』 岩波書店
- 堀川敏寛 (2018) : 『聖書翻訳者ブーバー』 新教出版社
- いのちのことは社 (2007) : 『バイリンガル「聖書」』
- 加藤 隆 (1999) : 『「新約聖書」はなぜギリシア語で書かれたか』 大修館書店
- カウフマン、トーマス / 宮谷尚実 訳 (2010) : 『ルター 異端から改革者へ』 教文館
- 川口 洋 (1996) : 『キリスト教用語小辞典』 同学社
- 河崎 靖 (2015) : 『ボンヘッファーを読む』 現代書館
- 河崎 靖 (2017) : 『ルーン文字の起源』 大学書林
- 河崎 靖 (2019) : 『神学と神話』 現代書館
- クライン R.A. 他 / 佐々木勝彦 他 訳 (2013) 『キリスト教神学の主要著作——オリゲネスからモルトマンまで』 教文館
- 前田護郎 (131975) : 『聖書』 (世界の名著 12) 中央公論社
- 松本宣郎 他 (2009) : 『キリスト教の歴史 I』 山川出版社
- 森 平太 (2004) : 『服従と抵抗への道』 新教出版社
- 森田 信也 (2002) 「『ストラスプールの誓約』の言語学的考察」 東洋大学『経済論集』、S.285-297.
- 村上 紳 (2003) : 『ボンヘッファー』 清水書院
- 鍋谷堯爾 (2009) : 『創世記を味わう I』 いのちのことは社
- 日本聖書協会 (2000) 『死海写本と聖書の世界』 (キリスト降誕 2000 年「東京大聖書展」実行委員会)
- 日本基督教団出版局 (21992) 『新約聖書注解 I』
- 日本基督教団出版局 (1996) 『旧約聖書注解』
- 岡崎 晋 (1999) : 「ルーン文字とそのメッセージ—スウェーデン、その他の北欧諸国のルーン文字銘文から—」『学習院大学言語共同研究所紀要』 第 23 号、S. 3-14.
- 大沢一雄 (2012) 『アングロ・サクソン年代記』 朝日出版社
- ページ R.I. / 菅原邦城 訳 (1996) : 『ルーン文字』 學藝書林 (大英博物館双書)
- ベティグリー、アンドルー / 桑木野幸司 訳 (2017) : 『印刷という革命』 白水社
- 佐藤 研 (2003) : 『「聖書」時代史 新約篇』 岩波現代文庫
- シュミット、デイトマル / 雨宮栄一 訳 (1959) : 『マルティン・ニーメラー その戦いの生涯』 新教出版社
- 『聖週間の典礼』 (会衆用) オリエンズ宗教研究所

- 下宮忠雄 (1994) : 『ドイツ・西欧 ことわざ・名句小辞典』 同学社
- 塩野七生 (2005) 『ローマ人の歴史』 XIV 新潮社
- 塩谷 饒 (1975) : 『ルター「聖書」のドイツ語』 クロノス
- 塩谷 饒 (1983) : 『ルター「聖書」』 大学書林
- シュタインバッハ、ペーター & トゥヘル・ヨハネス / 田村光彰 他 訳 (1998) 『ドイツにおけるナチスへの抵抗 1933-1945』 現代書館
- 徳善義和 (2004) : 『マルチン・ルター 原典による信仰と思想』 リトン
- 徳善義和 (2007) : 『マルチン・ルター 生涯と信仰』 教文館
- 徳善義和 (2012) : 『マルティン・ルター ことばに生きた改革者』 岩波新書
- 對馬達雄 (32017) : 『ヒトラーに抵抗した人々』 中公新書
- 山崎和明 (2003) : 『ボンヘッフアーの政治思想』 新教出版社
- 山崎和明 (2003) 「反ナチ抵抗牧師の決断 —— ヒトラー暗殺・クーデタ計画 ——」 『キリスト教文化研究所紀要』 (金城学院大学) 第 8 号, 1-48.
- 山谷・高柳・小川 (381995) : 『「新約聖書」略解』 日本基督教団出版局
- 和田 忍 (2016) : 「アングロ・サクソン期のイングランドにおける異教信仰の痕跡に関する一考察——ウェドモアの条約と第クヌート法典における文書を中心に——」 中央大学『人文研紀要』 第 85 号、125-153 頁
- Büchmann, Georg (1864, <sup>2</sup>1966) *Geflügelte Worte*. Berlin-Darmstadt-Wien : Deutsche Buchgemeinschaft.
- Campanhausen, Hans Freiherr (1968) *Die Entstehung der christlichen Bibel*.  
*Lost Scriptures: Books that Did Not Make It into the New Testament*. Oxford : Oxford University Press.
- Hamp, V. et al. (1979) *die ganze heilige schrift*. Prisma Verlag.
- Hoffnung für Alle® (Hope for All) Copyright © 1983, 1996, 2002 by *Biblica, Inc.*®
- Martin Luthers Werke*. Kritische Gesamtausgabe (Weimarer Ausgabe) Band 18 (1908). Weimar : Hermann Böhlau.
- Metzger, Bruce (<sup>2</sup>1968) *The Text of the New Testament*. Oxford : Oxford University Press. 『新約聖書の本文研究』 橋本滋男 訳 (日本基督教団出版局)。なお、Metzger (<sup>1</sup>1964) の初版を元にした独語訳 „Der Text des Neuen Testaments“ (1966, Kohlhammer) がある。
- Mieder, Wolfgang (1979) *Deutsche Sprichwörter und Redensarten*. Stuttgart : Philipp Reclam jun.
- Quadro-Bibel* (2010) 5.0 Vollversion (German Edition)

Vennemann, Theo (2011) „**Griechisch, lateinisch, etruskisch, karthagisch? Zur Herkunft der Runen.**“ In: Elvira Glaser, Annina Seiler & Michael Waldispühl (Hg.) : *LautSchriftSprache*, Beiträge zur vergleichenden historischen Graphematik. 2011. Zürich : Chronos. S.47-82.